

### 吉野作造随筆解題

飯田, 泰三

---

(出版者 / Publisher)

法学志林協会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法学志林 / 法学志林

(巻 / Volume)

92

(号 / Number)

2

(開始ページ / Start Page)

95

(終了ページ / End Page)

141

(発行年 / Year)

1994-12-22

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00003355>

# 吉野作造随筆解題

飯田 泰三

はじめに

一九九五年五月より『吉野作造選集』全一六巻が刊行される(岩波書店)。その第二二巻・随筆篇(第一回配本)のために私が書いた解題が、予定の頁数を大幅に超過したものになった。

そこで選集に付する解題としては何分の一かの分量に縮めて書き改めねばならないが、他方、すでに書いた初稿のほうも、吉野作造の事歴と仕事、およびその周辺を知るための基礎的事実を提供するものとして捨て難く、中にはいくつかの新事実の発見も含まれているので、本誌の研究ノート欄を借りて活字に残しておくことにした。

随筆各篇は、A 自分を語る、B 知友・先達を語る、C 信条を語る、D 見聞を語る ほか、に分類したうえで、執筆

年代順に配列してある。

なお、以下の作品ごとの解題では、吉野作造の事歴についての引照が時系列に沿わない形で行なわれるので、繙読の便宜のため、ここにあらかじめ吉野の略年表を掲げておく。

明治二十一年 一月二十九日 宮城県志田郡古川町字大柿九六番地に生る

同 一七年 三月 宮城県古川小学校に入学

同 二五年 五月 二五年卒業

同 二五年 五月 宮城県尋常中学校に入学

同 三〇年 三月、卒業

同 三〇年 九月 第二高等学校に入学

同 三二年 七月、卒業

同 三二年 七月三日 仙台浸礼教会で受洗

同 三三年 五月一日 阿部たまのと結婚

同 三三年 九月 東京帝国大学法科大学に入学

同 三七年 七月、卒業

同 三七年 七月 政治史研究の目的で東京帝国大学大学院に入る

同 三八年 一月 『ヘーゲル法律哲学の基礎』

同 三九年 一月 清国直隸總督の招聘に応じ天津に赴

吉野作造随筆解題(飯田)

同	四〇年九月より北洋法政専門学堂 習に転ず	同	七年三月二十四日	「支那革命小史」「戦前の欧州」 賛育会の設立に参画、理事に就任 「所謂出兵論に何の合理的根拠あり や」
同	東京帝国大学法科大学助教授に任せ られる	同	年四月	
同	政治史及政治学研究のため満三カ年 間独国英国及米国へ留学を命ぜられ る 三月三〇日、出発	同	年一月三日	神田南明倶楽部で浪人会と立合演説 会
同	大正二年七月三日、帰朝	同	年二月三日	黎明会結成
同	「民衆的示威運動を論ず」	同	八年四月	「対外的良心の発報」
同	東京帝国大学法科大学教授に任せら れる 政治史講座担任	同	年六月	「北京学生団の行動を漫罵する勿れ」
同	「日支交渉論」「欧州動乱史論」	同	年九月一日	政治学講座兼担を命ぜられる
同	「現代の政治」	同	九年六月四日まで	
同	「憲政の本義を説いて其有終の美を 済すの途を論ず」	同	年二月二十七日	有限責任家庭購買組合を設立、理事 長に就任
同	「満韓を視察して」	同	年	「普通選挙論」
同	「欧州戦局の現在及将来」	同	九年一月三〇日	森戸事件特別弁護人として東京地裁 に出廷
同	「満韓を視察して」	同	年五月	文化生活研究会に参加
同	「欧州戦局の現在及将来」	同	年	「社会改造運動に於ける新人の使命」
同	東京帝国大学学生基督教青年会理事 長に就任	同	一〇年	「第三革命後の支那」
同	東京帝国大学学生基督教青年会理事 長に就任	同	一一年	「二重政府と帷幄上奏」
同	東京帝国大学学生基督教青年会理事 長に就任	同	一二年一月	「朝鮮人虐殺事件に就いて」

同	一三年	二月 七日	朝日新聞社入社 三月五日、東京帝 国大学法学部嘱託講師	同	三年	二月	第一回普通選挙に宮城県より立候補 した女婿赤松克麿を応援
同	年	二月 二五日	神戸で「我国憲政発達の歴史的背 景」を講演	同	年	二月 二三日	赤松落選 この日より三月末まで肋 膜炎再発で臥床
同	年	三月 二八日	「枢府と内閣」を大阪朝日新聞に連 載開始 四月三日、完結	同	四年	九月	肺結核の初期らしいと判明 この月一杯臥床
同	年	六月 二六日	朝日新聞社退社	同	年	二年	『日本無産政党史論』
同	年	一月	明治文化研究会を創立	同	年	五年	『近代政治の根本問題』
同	年		『新井白石とヨワン・シローテ』	同	年	七年	『現代憲政の運用』
同	年		『露国帰還の漂流民幸太夫』	同	年	七月	『現代政局の展望』『対支問題』
同	年		『斯く信じ斯く語る』	同	年	一月	『民族と階級と戦争』
同	年	一月 一〇日	肋膜炎のため入院 六月二七日まで	同	年	一月 一八日	社会大衆党結成を裏面で援助、顧問 に就任
同	年		『公人の常識』	同	年	三月 二八日	賛育会病院に入院
同	年	九月 一〇日	財団法人賛育会理事長に就任	同	年	三月 二八日	返子小坪の湘南サナトリウム病院で 死去
同	年	一 一 二 月	社会民衆党結党のために尽力	同	年		木村毅他編『閑談の閑談』
同	年		『現代政治講話』『問題と解決』	同	年		川原次吉郎編『古川余影』
同	年	一月	「我が国無産政党史の辿るべき途」	同	年		
同	年	一〇月	『明治文化全集』三〇巻、刊行開始	同	年		
同	年		昭和五年七月完結	同	年		
同	年		『古い政治の新しい観方』	同	年		
同	年		『講学余談』	同	年		

吉野作造随筆解題 (飯田)

## A 自分を語る

評論家としての自分並佐々政一先生のこと

雑誌『新人』の「内外近時評論」の一節として、大正七年一、三月号に三回に分けて連載された「自己のために弁す」が、のち、昭和二年五月、『講学余談——吉野作造著作集 主張と閑談 第六——』の「回想」に収録されたとき、このように改題されたものである。吉野作造選集では、原則として初出主義を取り、実質的に意味のある変更があったときに、再録版を底本として用いる方針であるが、本稿の場合、初出時と再録時に十年近い隔たりがあるせいか、かなり細かく手が入って、文章的にも整備されているので、『講学余談』版の方を底本とした。内容的な相違はほとんどないが、「予は」という語り口が「私は」に改められ、また、「且又殆ど全部速記若くは筆記によるので、多くの人の如く自ら筆を取るのではないから、之に由つて費す所の時間も人の想像する程多いものではない。」の傍線部分が削除され、同じ趣旨から、「最も予自身から云へば頼まれるのを好機会に書いて貰ふと云ふ事が必要でもある。」が、「尤も私自身から云へば頼まれるのを好機会に書く」と云ふ事が必要でもある。」と改められた、等が改変の主なものである。

後者の点に関連していえば、本巻（『吉野作造選集第二巻。以下も同じ』）所収「龍田君と私」にあるように、ある時期までの『中央公論』の吉野論文のほとんどは、龍田栲陰による口述筆記に成るものであった。初期の『新人』、『新女界』、『横濱貿易新報』、また『実業之日本』、『文化生活』以下にも、それぞれ担当する筆記者がいたのである。吉野が断続的に残した日記の記述によれば、この時期の『新人』の原稿は「有富（虎之助）君」が筆記していた。

なお、同じく日記の大正六年十一月二十九日の項に、「佐々政一先生の葬儀に列す」とあり、これと『大学評論』大正六年十二月号に吉野作造論（人物月旦 政治学者としての吉野博士と大山氏）が出たことが、この文章を書くきっかけとなつたと推測される。『大学評論』は、吉野門下の星島二郎らが同年一月に発行した月刊誌で、主筆は吉野の親友、小山東助。彼がこの号に書いた「政治学界の双壁——吉野作造と大山都夫」は、西谷耕三「鼎浦小山東助の思想と生涯」昭和五十四年に収録。）

ちなみに、大正十一年二月十七日の吉野日記には、「夕方までに、文化生活に寄すべきフリー・メーソンの続きを草し、又改造の需に應じて帷幄上奏論を書く。之からは人手をからず成る丈け自分で書いて見たいと思ふ。さうでないとい人格の味ひがどうも出て来ない。文もタラタラして面白くない。力も抜け

る。」とある。これ以後吉野は、口述筆記をなるべく避けることにしたらしい。

また、文中、「私自身の密かに最も不得意とする政治学上の議論」と言い、「私が曾て『中央公論』に掲げた憲政論」を「あんな欠点に富んだ論文」と言っていて、いわば「民本主義時代」を切り開いたともいえる歴史的な論文、「憲政の本義を説いて其有終の美を済すの途を論ず」にたいし、それを自分の「代表作」とされるのは不本意だとしている点については、本巻後掲の「民本主義鼓吹時代の回顧」をも参照されたい。

たしかに、このころまでの吉野の仕事は、刊行された著作名で見ても、初期の『ヘーゲル法律哲学の基礎』（明治三十八年五月）と『試験成功法』（瀋陽學士、同三十九年九月）を別にすれば、『日支交渉論』（大正四年六月）、『欧州動乱史論』（同四年八月）、『現代の政治』（同四年十一月）、『現代の政治第二 欧州戦局の現在及将来』（同五年五月）、『支那革命小史』（同六年八月）、『戦前の欧州』（同六年九月）というふうに、本文で言うところ、「其資料を毎日々々の新聞雑誌の報導に取る、而して是等複雑なる報導を凝類し整頓し、歴史の背景によりて之に一定の判断を下す」という性格の強いものだった。ジャーナリストイックな材料を、歴史家的センスで整理し判断を下すというのが、初期吉野にとつての「現代政治の研究」だったの

吉野作造隨筆解題（飯田）

である。ただし、その「判断」の背後に、青年期以来つちかつた「基督教的人道主義」があるというのであった。これらは率直に当時の彼の自己認識を語ったものと見てよい。

また、吉野の中國革命史への関心については、選集第九巻および第七巻を見られたい。本文中にある、北輝次郎（一輝）が第三革命開始後まもなく発表した長文の意見書とは、「支那革命党及革命之支那」のことで、『支那革命外史』（みすず書房、北一輝著作集、第二巻）の原型となつたものである。

#### 所謂「私共の理想郷」

『改造』の大正十年七月の夏期臨時号に、「変つた村」特集の冒頭に掲載されたものである。この特集の他の寄稿は、「哲人村としての信州神川」土田杏村、「伊豆大島の桃源郷」有島生馬、「私の見た新しき村」中村亮平、「貧民窟の夏」賀川豊彦、「新しき村についての対話」武者小路実篤であった。

これを書いたきっかけは、本文のなかにある通り、この年六月号の『国本』に、「畑毛理想郷の真相」望月茂という、暴露もの風の記事がでたことにある。『国本』は国粹主義的な雑誌だが、この号では同時に、三井甲之と千葉龜雄に、「福田・吉野・河上三博士の思想及人物」を書かせている。

畑毛のことは日記にも頻出する。本巻に掲げた畑毛の吉野家

写真は、大正十二年五月二十七日の記事に貼りつけられていたものである。

### 村芝居の子役

この短文は、『婦人公論』大正十二年一月号が、諸名家に「幼年時代の思出」を一頁ずつのスペースで寄せることを求めたのになし、答えたものである。吉野が頻りに幼少時代のことを語り出すのは、大正十四年一月、肋膜炎で半年間入院し、さらに七月、葉山に一月余転地療養をするという経験をしてから以後のことだった。その中でこれは、さきの佐々醒雪に作文指導を受けた思い出や、つぎの二文などとならんで、なんらかの意味で他から要請されて成ったものである。

『嚮学余談』（昭和二年）の「回想」に収録され、没後の『閑談の閑談』（木村教編、昭和八年六月）に再録された。

予の一生を支配する程の大いなる影響を与へし人・事件及び思想

大正十二年二月の『中央公論』が、こういう題で四十一名にアンケート方式で問うたのに答えたもの。『斯く信じ斯く語る——主張と閑談 第三輯——』（大正十三年十一月）に収録されたときには、「一生に大影響を与へし人・事件・及び思想は

何か」の問に答へて」と改題された。

注目すべきは、「私の今の思想に大きな影響を与へたものを今古の聖賢に求むるなら、おこがましいがカントと云ひたい。」の「カント」が、単行本所収時に「荘子」と改められたことである。どちらも、「但し之は之からも大に研究したいので、過去に於て私の一生に多大の影響を与へた思想として挙示するのは不適當のやうだ。」とつづくが、一年九ヶ月を隔てて吉野がこのようにわざわざ書き替えたことの意味するところについては、本巻「解説」の中で考えてみたい。

この一文は、没後の『古川余影』（川原次吉郎編、昭和八年六月）にも再録された。

本文中の「人」に名前があがっているうち、「小野塚博士」については本巻所収「民本主義鼓吹時代の回顧」を、「海老名弾正先生」については同「新人運動の回顧」を、「故小山東助」については同「小山君の思ひ出」を、また内ヶ崎作三郎については赤松克麿編『故吉野博士を語る』（昭和九年四月）所収の「吉野作造君と私」を、今井嘉幸については同「支那時代の吉野君」を、それぞれ参照されたい。

### 新人運動の回顧

大正十二年四月号『新人』吉野は本郷教会青年部の機関誌

『新人』にたいしては、その明治三十三年七月の創刊から大正十五年一月の終刊まで同人として寄稿しつづけ、初期には編集にもたずさわった。

『新人』のバックナンバーは平成二、三年、龍溪書舎から復刻された。(全五一巻)

吉野にとって海老名弾正との出会い、および「新人運動」とのかかわりが持った意味については、本巻「解説」で論ずることにする。

明治三十一年七月四日、吉野が栗原基の属する仙台北一番丁の浸礼教会で、内ヶ崎作三郎、島地雷夢とともに牧師中島力三郎から洗礼を受けたときは、内ヶ崎の前掲「吉野作造君と私」および栗原基「仙台時代の吉野作造君」(赤松前掲書)参照。

#### 軽佻なる批議

『文化生活の基礎』大正十三年四月号。標題の「軽佻」は、同誌の原題では「軽兆」となっていたが、本文中の用例にしたがって訂正した。『文化生活の基礎』は、森本厚吉が主催し、有島武郎と吉野作造が協力して作っていた、文化生活研究会の機関誌。

問題にされた「我國憲政発達の歴史的背景」が話された、朝

吉野作造隨筆解題(飯田)

日新聞社時局演説会の神戸での開催は、二月二十五日のことであった。これを記録した三月二十五日発行の朝日新聞社刊「時局問題批判」では、「現代政局の史的背景」という標題になっている。

日記によれば、この舌禍事件の前提となった朝日入社の話は、大震災後の大正十二年十月十二日ごろから始まっている。そして、翌十三年の二月五日、閣議で吉野の東京帝国大学教授の辞職が聴許され、夕方、大阪に立つ。六日、大阪朝日本社で社長以下重役の面々と会う。(七日の朝日新聞に、吉野と柳田国男の入社が「社告」として発表される。)八日には、柳田国男も来社して顔つなぎの会に臨み、同日、夜行で東京に帰っている。そして東京でしばらく種々の残務整理的なことをすませ、再び大阪へ向ったのが二十一日夜。吉野、柳田と、それに下村海南、米田実らも加わって、京阪神で「入社披露の演説会」をして回るためである。吉野は二十二日、大阪中央公会堂で「護憲運動批判」、二十三日、京都市岡崎公会堂で「最近の政論に現れた二三の謬想」、そして二十五日、神戸青年会館でこの「我國憲政発達の歴史的背景」を話した。それを、かねて待ち構えて狙っていた、反「大阪朝日」の国粹派グループと検察官僚の一派が、いわば出会いがしらにとらえて起こした事件である。

その後、三月には、同じく朝日社主催の講演会が、二十三日、



甲府、二十五日、宇都宮、二十七日、前橋、二十九日、高崎、三十日、福島とあった。その間、論文「枢府と内閣」を書いて、三月二十八日、四月三日、大阪朝日新聞に連載している（東京朝日は四月一日、六日）。四月五日には、社説一篇を書いて、東京本社の部長会議に臨んだりしているが、彼が初めて不穏な動きを日記に書き留めているのが、四月十一日。「下村君、中京方面の講演を了へて帰社。大阪にて木村三郎なる者、頻りに本社を脅して居るなどの話をきく。東北遊説は盛岡青森をやめることにする」。しかし、この「輕佻なる批議」を見ると、もっと早くから、吉野の「五箇条の御誓文は維新政府の悲鳴」という発言が「不敬呼ばり」されていたことがわかるのである。

吉野の大正デモクラシー運動における盟友の一人、長谷川如是閑は、吉野の大阪朝日入社の話をしたとき、「氏が『大阪朝日』へ行つて氏一流のあの朗かな調子でやつたら頗る危険だといふことを予感して」、「当時の『大朝』と或る筋との対立関係について充分の認識をもつて、慎重の態度でかゝらなければ、折角の新しい仕事も挫折に終るに極つてゐると考へて、それを注意しやうと思つたのだが」、その機会のないまま、「最早手遅れとなつて」しまつたことを痛嘆した。（『吉野博士と私』「批判」昭和八年四月号、赤松前掲書にも再録）

六月一日、「昼頃、東京地方裁判所黒川検事の名にて、明日午後一時出頭せられたしとの電話あり。之より先き大阪にては、発行人印刷人相ついで検事局に呼ばれ、五箇条御誓文を悲鳴と云つたといふ事件について調べらる。之が本人の僕に飛火して取調を受くべしとは予期せし所なりしも、僕の方は寧ろ秘密……」というところで、吉野の日記は一時中断している。（『秘密……』は、おそらく、論文「枢府と内閣」における枢密院批判のほうだが、五箇条御誓文一件よりも、檢察やその背後の黒幕のターゲットになっている、と吉野は見ている意であろう。）

結局、檢察当局は吉野が退社して謹慎の意を示せば不起訴にする意向を提示。それを承けて吉野は、朝日新聞社の立場を考慮して退社を申し出、六月二十六日受理された。（村山龍平伝）

そして七月一日に再開した日記によれば、七月十一日、「検事局に出頭す。一時、黒川君に遇ふ。曰く、取調の結果不起訴になりました、之からあと注意して下さい、と至極簡單なり」。ちなみに、黒川検事は吉野の大学の教え子のひとりであった。なお、後年、昭和五年三月二十一日の日記に、この時のことを回顧した記述がある。「米田「実」君が村田勳氏の紹介で始めて見へたのは大正八年の頃か。やがて村山社長長の命を受けて、予に頻りに朝日入社をすゝめる。大学の教職に恋々として容易

に応じなかつたのを、遂に大正十二年の夏に至りて口説き落さる。十三年二月、帝大を辞して直に朝日の人となる。忽ち筆禍事件なるものを引起し、五月末、下村宏君、村上長拳君、二君に招かれて日本倶楽部の一室に会见し、懇ろに退社を求められる。社員たることを僅に四ヶ月。予に何の過失なくして、乃ち失業の群に入る。……朝日を退きしは予にとつて財政的の大打撃なり。爾後の甚しき窮迫は専ら之に帰するも、併し、予の学問にとつて之が幸であつたか不幸であつたかは、容易に断定するを得ず。但し、貧乏——過勞——病氣、之れだけは免るゝを得ず。」

悪者扱さるゝ私

大正十三年十一月、『文化生活の基礎』の「公人の常識」の冒頭の一節。この標題は、翌年十二月、「主張と閑談 第四輯」として出た『公人の常識』に収録されたさいに付けられた。なお、『閑談の閑談』にも再録。

後半の琵琶歌「甘糟大尉」に出てくる、大震災時、「社会主義又共産主義や、無政府主義にデモクラシー」の危険な「主義者の根絶」の対象として、憲兵隊筋で大杉栄（大過境）とならんで吉野（阿久森）の名前が挙がっているのは、かならずしもフィクションだけではない、現実にありえた事象だった。吉野

吉野作造隨筆解題（飯田）

とこの段階ではさほど思想的に逕庭のない大山郁夫が、九月二日、落合の憲兵屯所に連行され、ただし新聞社が嗅ぎ付けて四方八方へ電話で問い合わせたりしたので、その夜放免になる、といった事態も起こっていたからである。『大山郁夫伝』昭和三十一年、田部井健次「大山郁夫」昭和二十二年、参照

吉野自身は、九月二十一日の日記に、大杉夫妻等の虐殺の詳報を得て記している。そして十月一日、帝國ホテルで改造社社長山本実彦肝煎りの二十三日会にのぞみ、福田徳三、渡辺鉄蔵、末弘巖太郎、中野登美夫、堀江掃一、下村海南らと、「大杉事件につき三ヶ条の建議をする旨を決議」した。それにもとづき十月二十日、堀江掃一とともに「二十三日会の決議を齎して、総理大臣内務大臣司法大臣を歴訪す。皆不在。相当の代人に存意を述べて引取る。内務大臣官邸では特に岡田警保局長に遇ふ」。なお、十月十五日、東京朝日新聞「甘粕大尉減刑運動に就て」、および「改造」十一月号「甘粕事件の論点」をも参照

また十月八日には、「予の発案にて朝鮮人虐殺に関する」二十三日会も持っているから、右の「決議」には、朝鮮人虐殺問題も付け加えられていたかもしれない。

大震災時の朝鮮人虐殺にたいする吉野の対応については、選集第八巻の解説で詳しく触れられるが、早くも九月三日の日記に次のような記述がある。「此日より朝鮮人に対する迫害始る。

不逞鮮人の此機に乗じて放火、投毒等を試むるものあり大に警戒を要すとなり。予の信ずる所に依れば、宣伝のものは警察官窺らし。無辜の鮮人の難に斃るゝもの少らずといふ。」そして、真相究明と原因および責任追求、また下宿がなくて困っている朝鮮学生の世話などに精力的に動いている。『中央公論』十一月号の巻頭言「自警団暴行の心理」、同時評の「朝鮮人虐殺事件に就て」、等参照)

なお、吉野が東大を辞めて朝日新聞に入社することにしたのも、大震災の影響であった。「之より先き氏は横浜の某富豪を説いて、支那人、朝鮮学生の学費を出して貰つてゐたが、該富豪が地震の影響で世話が六ヶしくなつたので、氏は自分で費用を造らうと考へたのである。それは大学教授の収入より新聞社の方がズツと善い待遇を与ふるからであつた。」(采田実「吉野博士のことども」、赤松前掲書)

#### 吉野先生のために妄をひらく

これまで公表されたことのない、吉野戯筆の自己紹介文である。増田道義氏が吉野が与えた肖像写真の裏に、ペン書きされたもの。増田氏から古川市吉野作造記念館に寄贈されたもののコピーの提供を受けた。

標題は、もともとではなく、本巻収録にあたって仮に編者が付

けたものである。原文にはなかった句読点と改行も、編者が補った。

増田道義は、これも古川市吉野作造記念館からのご教示によれば、明治三十五年、愛媛県今治市生れ。今治中学、松山高校を経て、大正十一年東京帝国大学法学部入学。卒業後、いったん大学院に籍を置いて民法ならびに労働法を研究したが、大正十五年二月、警視庁に入り、工場監督官等を務めたのち、昭和二年十月、関東庁に出仕して大連に赴く。金州民政署長等を経て、昭和七年、朝鮮総督府警察官講習所教授に転任。以後、昭和十五年、京城法学専門学校校長など、朝鮮の高等教育にたずさわり、戦後は弁護士として活躍した。平成四年八月二十二日、九十歳で死去している。剣道八段の明治の古武士的風格とともに、今治中学時代に受洗し、東大時代に監獄改良・非行少年感化に生涯を捧げた留岡幸助のキリスト教的人格に魅せられたという側面ももっていた。

吉野との関わりについては、東京の「吉野記念会」の第二回例会(昭和二十六年一月二十九日)で増田自身が語っている。大学に入ってすぐ、吉野の講義を聴講、「自分の講義は日本、支那、ヨーロッパと年々変わるから毎年きくと丁度よい」という吉野の言葉に従って、三年間聴き、研究室でも一年間接した。古川市吉野作造記念館準備室の聞き取りによれば、大正十四年

十月から始まった明治文化研究会の例会にも一回から参加し、断続的に以後も顔を出するなど、「先生の晩年のね、ま、一番の愛弟子だったんですよ」ということである。

なお、本文末尾の数字は執筆年月日。大正十四年六月十七日といえば、次項でふれるように、帝大病院に一月から入院していた吉野が、退院する十日前のことである。もはや面会謝絶も解けていたころ、増田が見舞いに訪れ、写真にサインでもと望んだのたいし、吉野がこの戯文を書きあえたという光景である。「野古川生」は、吉野が用いたペンネームのひとつ。

本文にある、父親の年歳が祖父嘉蔵の駄菓子屋から転身をはかり、呉服太物商として「綿屋」の吉野屋を発展させていった様子については、田中愼五郎「吉野作造 日本的デモクラシーの使徒」(昭和三十三年)が、「吉野屋」本家を継いだ吉野達三や、弟の吉野信次(昭和初年に商工次官)からのメモと聞き書きによって、紹介している。

また、作造自身、明治二十七年九月十一月、投書雑誌『学生筆戦場』に連載された作文「恵の露」(一)〜(三)において、父の恩恵についていくつかのエピソードを語っている。

転地先から「抄」

『文化生活の基礎』大正十四年九月号の「転地先から」のう

吉野作造隨筆解題(飯田)

ち、冒頭の三項を取ったもの。

文中の、木下尚江が指摘した『斯く信じ斯く語る』の一節とは、「生死を忘れて現在の生活を充実したい」(元)『中央公論』大正十一年十一月号の特集「死を念頭に置く生活と死を念頭に置かぬ生活」、『古川余影』にも再録)の中の「若し私が病身であつたら少しは「死」といふ問題を考へたかも知れぬ。所が生れ付甚だ薄弱の質の癖に、物覚えして以来実は病氣といふ程の経験をしたことがない。此頃は年のせいか若干倦怠を覚へるべしとあり、従つて可なり用慎はしてゐるが、兎に角自分は活き物だから少し位の病氣には勝ると自信してやつてゐる。云々」のことを指すのだろう。

見舞いによつてきた「木下君」と語り合う、この吉野のいかにも親密そうな様子は、本巻所収の「民本主義鼓吹時代の回顧」等に見える、古くからの木下との交流を考えれば、理解できる。吉野は大学から大学院時代にかけて、小山東助とともにキリスト教社会主義者たちに接触し、とくに木下とは、雑誌『新人』と『直言』の誌上で論戦を交わし、それを機に島田三郎の仲介で会つてもいるのである。(その「國家魂」と「基督教と社会主義」をめぐる論争については、選集第一巻に主要資料を収録した。)

そして、おそらく、そうした木下との親近感が、この前々年

の島田三郎の死と、それにづく島田三郎全集の編集の過程で、急速に復活したものであらう。(本巻所収「島田三郎先生の追憶——島田三郎全集刊行記念講演会——」参照)

吉野の発病から入院にいたる経過は本文にあるとおりだが、帝大病院島嶼内科を退院するのが六月二十七日。七月三日から葉山の「かぎや旅館」で転地療養し、「八月上旬段々雑踏して来るので一時引揚げる」。その間、「歯の治療のため時々東京に帰る」と「大正十四年八月十五日記」にある。本文「転地先から」はその葉山療養中に書かれたものである。

ともあれ、この大病と、半年以上におよぶ入院・療養の時期を境にして、吉野の生活と心境には、歴然と目に見えるわけではないが大きな変化が起こったように思われる。このとき吉野は四十七歳。五十五年の長いとは言えない彼の生涯は、はやくも晩年期に入った感もあるのである。前述のように、これ以後の吉野は自分を語る事が多くなり、幼少時や青年時代についての回顧的文章をあいっいで物している。それもこのことと無関係ではないだらう。

#### 本屋との親しみ

大正十四年十一月『誠堂古書目録』。同年十二月刊の「公人の常識」にも、「誠堂古書目録序」のサブタイトルをつけ

て収録。内容にはまったく変更はない。ただ、初出には冒頭に「大正一四・八・一八」と執筆年月日が入っていた点が違うのみである。この日付は、ちょうど吉野が葉山の療養から帰り、自宅と大学研究室を往復する生活にもどった直後にあたる。したがって、大病後の吉野が、おそらく最初に書いた文章ということにならう。

前半は、吉野が本格的に自己の少青年期について語り始めた、最初のもの。それが、このころ佳境に入りつつあった明治文化研究のための資料蒐集と結びついて、自分の古本遺案の歴史の話になった。「明治文化研究会」の発起人会を、尾佐竹猛、宮武外骨、石川巖、小野秀雄、井上和雄と開いたのが、吉野が病気で倒れる前の大正十三年十月三十日だった。

「明治の文化、殊にその政治的方面、就中それが西洋文化に影響された方面」の研究が、大正十年の夏から始まったということについては、日記の大正十一年の一月一日の項に、前年の主要な出来事をふりかえった中で次のように記している。(大正九年二月初め以降は、多事多忙をきわめたためか、日記の記述がほとんどなくなり、同年九月中旬から大正十年いっぱいはい、まったく書かれていなかった。)

「夏の初めより、日本開国史の研究を思ひ立ち、資料の蒐集に着手す。半年の間に可なりの新所蔵を加ふ。予の学的経歴に

於て之れ正に一紀元を開くものなり。」

その「日本開國史の研究」が「古本道楽」の復活という形をとったことについて、このエッセイでは「どうしたはづみか十年の夏急に思ひ出した様にあさり始めたのであった。」と言っているわけだが、後年の「資料の蒐集——明治文化の研究者として——」（本巻所収）では、「六月の某日神田南明クラブの古書展覧会へ行つて一挙に数百冊を買つたのが病みつきの始まりといはばいへる。」とある。

本文中の「小野塚法学博士のサゼッション」に関しては、田中惣五郎の前掲書が、「吉野の研究が対社会的にかたむきすぎること、先輩の小野塚喜平次総長らも懸念し、吉野みずからも反省した結果」、明治文化研究に向かった、という蠟山政道の「談話」を紹介している。

また、吉野は大正八年九月から、小野塚がバリで開催された世界政治学会出席のため外遊した際に、小野塚の「政治学」講義を代講した。（その時の吉野の「政治学の革新」構想については、飯田「吉野作造——ナショナル・デモクラットと「社会」の発見」田中・小松編『日本の国家思想 下』昭和五十五年、参照）帰朝後その内容を知った小野塚が、彼が努力を傾注していた「国家学からの政治学の自立」にとつて、吉野の取らうとしている「文化科学としての政治学」の方向が、いわば時期尚

吉野作造隨筆解題（飯田）

早と見て、国家権力からの「学の独立」を守るためにも、むしろ実証的な「明治文化研究」と結びついた「政治史」に専念するよう、「サゼッション」を与えた、ということであろう。

ただし、吉野自身の意識としては、選集第十一巻所収の「明治文化の研究に志せし動機」の末尾にあるように、「明治文化の研究は決して時勢と掛け離れた閑事業ではない」のであった。昭和二年十二月に完成した力作「我國近代史に於ける政治意識の発生」（『政治学研究 第二巻 小野塚教授在職二十五紀念』所収）の冒頭には、「本稿に於て私の研究せんとする主題は、永い間の封建制度に任せられ、天下の大政に容喙することを一夫罪惡と教へ込まれて来た日本國民が、近代に至り如何にして突如政治を以て、我等自身の仕事なりと確信するに至つたかを闡明せんとするに在る。」とあつて、これはまさに、大正デモクラシー運動を主導した吉野のアクチュアルな問題関心に直結したものにほかならなかつた。（尾佐竹益「明治文化研究の母としての吉野博士」『経済往来』昭和八年五月号、も参照。）

#### 小学校時代の思ひ出

明治文化研究会の機関誌『新旧時代』（のち『明治文化』と改題）の大正十四年二月号に出したものの、同号が「明治初期風俗研究号」だったため、自分の小学校時代の風俗に引き寄せて

思い出をたどったものである。『講学余談』および『閑談の閑談』にも収録。

ちなみに、この『新旧時代』の特輯号の目次を見ると、「ザンギリ物語」「石井研堂」「検校勾当座頭の研究」和田千吉、「ボリスと暹卒」尾佐竹猛、「風俗壞乱の新聞雜誌」麻姓外骨、「明治五年娼妓開放令」石川巖、「文明開化和歌集」櫻木二郎、明治十二年頃の新橋芸者」吳園情史とつづき、そのあとに吉野のこの一文が入るのである。

吉野が明治十七年三月に入学した古川小学校は、さきの「本屋との親しみ」にあったように、「入学のとき束脩のつもりか一升徳利を提げて校長に調し、その後暫くは年長の姉のそばに机をならべることを許された程だから、昔の寺子屋から脱したばかりの不整頓極まる学校であった。」それが明治十九年四月の小学校令公布をうけて、「二十年頃から段々学校らしい学校とな」っていった過渡期——それは地方の小さな町にまで及ぶ「文明開化」の下降でもあった——の風景を描いているのである。

吉野は、大日本帝国の教育体系が整備され、いわゆる制度通過型インテリが産出され始める（学校秀才がそのままエリートになる）、その第一号ともいふべき世代に属するわけである。十二歳の小学校四年生の二月十一日に大日本帝国憲法が發布さ

れ、その年、高等小学校に進む。明治二十五年五月、十四歳で宮城県宮城尋常中学校（のちの仙台一中、現仙台一高）に入学するが、これは前身が私立東華学校といって、京都同志社の分校的なキリスト教系の学校だった。この年、土地建物が県に提供されて、宮城県で最初の中学校となり、大槻文彦が初代校長として赴任したものであった。（内ヶ崎作三郎、前掲「吉野作造君と私」）

吉野は小学校を一番で卒業して答辭を読み、その新設の中学校の第一回生となったわけだが、古川町では同町の中学入学第一号として、町会から大槻文彦の『言海』一冊を祝いに贈った（吉野信次「兄の中学に入る迄」赤松前掲書）。そして作造の仙台行きの当日には、つぎの「投書家としての思ひ出」にもあるように、小学校の全校生徒が旗を立てて町はずれまで見送ってくれたのである。なお、町会の祝い一件には、作造の父、年蔵が、さきの「吉野先生のために妾をひらく」にあったように、日清戦後には町長に挙げられるような「徳望」の持ち主だったことが関係しているよう。また、吉野は中学でも一番の成績で、二年から特待生として授業料免除になった。（それから中学、高等学校、大学を通じて、常に首席であったと思ふ。）小山東助の前掲「政治学界の双壁——吉野作造と大山郁夫」

投書家としての思ひ出——少年時代の追憶

『文藝春秋』大正十五年六月号および九月号。六月号では、標題が「投書家としての思ひ出(一)」となっていた。その(二)にあたるものが、「少年時代の追憶」と改題されて、二号を隔てて出たのである。のち二篇とも、「少年時代の追憶」の題でまとめられて『講学余談』に収録され、さらにその形で『閑談の閑談』および『古川余影』に再録された。

文中、「中学三年頃ちよいく『文庫』や『学生筆戰場』に投書したことがある。『文庫』には多く匿名でやった。お恥しいから其名は内証にしておく。」とあるが、この「筆名」は、千葉亀雄の証言(あの頃の吉野博士「赤松前掲書」などによれば、「松風琴」というものだったらしい。いま選集編集部で確認できるところでは、明治二十七年七月十五日発行の『少年文庫』第十一巻六号に「寛の筆」が、また同年十二月十五日発行の同第十二巻二号に「山内一豊夫人」が、「松風琴」の名で投稿されている。

『学生筆戰場』の方では、本巻所収の「秋の日」(十月)、および先にふれた「恵の露」(一)〜(三)(九〜十一月)のほか、「戦国三傑の概論」(十月)、「漢高祖雍齒を封ずること」(十月)、「石割梅」(十一月)が、こちらは本名で出ている。

また、昭和七年四月二日の日記に、つぎのような記事がある。

吉野作造隨筆解題(飯田)

宮武外骨が関西から蒐集してきたものの中に、明治二十八年発行の『青年文』があった。『文庫』の姉妹雑誌のやうなもの。二冊あつたが、一冊に予の寄稿あり。松風琴坊といふ署名で、林子平の事を書いてある。之はその頃中学に在りて、修身の時間に大槻文彦先生より承つた話也。」

しかし、これ以外にも、本文に出てくる『三余の門』や『小国民』所載のものを始めとして、まだまだ未見のものがありそうである。

なお、吉野は明治三十年九月に、本文にあるような経緯で第二高等学校の法科に入るわけであるが、このとき彼は二中で成績優秀の特待生であつたため、無試験入学であつた。また、二高時代の吉野については、前掲の内ヶ崎作三郎の「吉野作造君と私」のほか、吉野が吉田松陰の松下村塾の真似をしていると噂されたエピソードを紹介している真山胄果「青年時代の吉野君」(赤松前掲書)を参照。

初めて読んだ書物

『東京朝日新聞』大正十五年十一月十七日。『講学余談』所収、『古川余影』に再録された。底本としては、若干の手が加わっている『講学余談』所収のものをを用いた。



## 青年学生の実際運動「抄」

『中央公論』大正十五年十二月。『日本無産政党論』（昭和四年八月刊）所収。ただし、全三節からなる最後の二節、「昨今の学生の実際運動に関係する者についての感想」は、割愛した。本巻収録の主意が、吉野が明治三十八年の初めに「朝鮮問題研究会」を作った、学生時代の回顧を収録することにあつたからである。

なお、文中の李殷徳のその後の消息について、『日本無産政党論』の「著者はしがき」において、「名古屋の旧友渡瀬常吉君と朝鮮大邱の末見の人奥山仙三君とから」来た書信が紹介されている。朝鮮に帰った李（細川）は、総督府の学務局勤務の後、水原の勸業模範場で働いていたが、大正六年流行性感冒で死去した、というのである。

吉野は大正五年三月二十七日から四月十九日まで、満州から朝鮮に旅行する。（そのときの紀行「滿韓の旅」の一部を、本巻に収録した。）このとき以後、吉野は日本の朝鮮統治政策への批判と、朝鮮独立運動への理解を鮮明にしつつ、朝鮮問題について積極的に発言していく。その様相については、選集第八巻を参照されたい。

## 帝大青年会寄宿舎に始めて導入つた頃の事ども

## 『開拓者』昭和二年二月。

吉野の東京帝国大学学生基督教育年会とのつきあいは深く、のちに大正六年には同会理事長にも就任している。ヨーロッパ留学のさいも、彼の行動圏が広く大学を越えて市民社会の中に入り込みえたのは、各地のキリスト教青年会を通じての側面が大きい。

本文末尾近くの「天文学の故一戸直蔵君」は、のち大正四年、吉野、中沢臨川、佐々木惣一、三淵忠彦とともに「大学普及会」を作り、『国民論壇』を発行した人物。そのさいの事務局役だった。この『国民論壇』に吉野が載せた「欧米に於ける憲政の発達及現状」（選集第二巻所収）が、彼の「民本主義」論の骨格を初めて明らかにしたものとなった。反骨の民間天文学者、一戸については、中山茂『一戸直蔵——野に下りた人——』（シリーズ民間日本学者、リポレポート）参照。また、大学普及会については、太田雅夫「大正初期の UNIVERSITY EXTENSION——大学普及会と『国民論壇』を中心として——」（桃山学院大学教育研究所 研究紀要、一九九四年三月）が詳しい。

## 民本主義鼓吹時代の回顧

『社会科学』昭和二年二月号。のち、『閑談の閑談』、『枢府と

内閣 他』(朝日文庫、昭和二五年、朝日新聞社)、『日本の名著 吉野作造』(三谷太一郎編、昭和四七年、中央公論社)、『近代日本思想大系 吉野作造集』(松尾尊允編、昭和五一年、筑摩書房)等に再録された。

文中、終りの方で言及されている欧米留学時の見聞のことであるが、日記によってその二、三を確認しておく。

(一) については、ロンドンに着いて二週間ほど経った一九一三年三月二十九日と、さらに三週間余り経った四月二日に、ウェストミンスターの議會を見学に行っているが、あとは主として新聞によって、「上院権限縮小問題の成行を見た」ものらしい。四月一六日、ウィンザーに行ったときは、「此頃 *Suffragettes* の乱暴甚シク」城の中の見物が許されなくなつて「遺憾」であつた、というようなこともあつた。また、五月二五日にケンジントンに見にぎつた『*The Cap and Balls*』という新作物の芝居は、「保守党ニ属スル貴族ノ独娘ガ、幼少ヨリ懇意ナル Duke 何某トヤラニ云フ青年ヲ袖ニシテ、父ノ最モ嫌悪スル政敵労働党ノ代議士某ヲ慕ヒ、遂ニ之ト結婚ノ約ヲ結ブト云フ筋ニテ、所謂近代的女性ヲ、政治界ノ錯綜セル事件ニ引ツカラメテ、面白可笑シク作り成セル Comedy ナリ」というものだった。

(二) については、吉野がウィーンを去る九日前の一九一一年九月一七日と翌日、さらに二二日の日記を引いておく。一七

吉野作造隨筆解題(飯田)

日、日曜日。「憂。朝起キテ新聞ヲ見ルト、今日 *Lebensmittel-leuerung* ノ問題ニ関シ、市民ノ *Demonstration* アリ、九時半マデニ *Rathaus* ノ庭前ニ集ル、トアリ。依リテ直ニ服ヲ改メテ、往ツテ見ル。空曇リ、今ニモ降りソウナリ。市中往來何トナク賑ヤカナリ。但シ往來スルモノ主トシテ下層社会ナルガ如シ。 *Rathaus* 付近ニ至ルト群衆多シ。遙ニ喊声ヲ聞ク。愈庭前ニ至レバ、群衆集會シテ立錫ノ地ナク、市役所ノ階段ノ上ニハ、今正ニ三所ニ分レテ、弁士滔々ト懸河ノ弁ヲ振ツテ居ル。聴衆之ニ撲シテ叫ブ。夫レカラブラタ々出テ見ルニ、*Holding-theater* ヨリ議事室、*Museum* ノ方ニカケテ、人山ノ如シ。只宮殿ノ辺ニハ、兵士巡查扣ヘテ、警戒ヲサ々々怠リナシ。ヤガテ演舌モ了ヘタリト見エ、人民段々繰リ出ス。一隊ハ陸軍省ノ方ニ赴キシガ、警官ノ為メニ遮ラレテ、官省ノ方ニ進ム能ハズト見ルヤ、一隊ハ左ニ折レタレドモ、喧々囂々容易ニ去ラズ。夫ヨリ軋ジテ *Ring* ノ方ニ往ツテ見ルニ、*Hofopertheater* ノ辺、*Museum* ノ辺リ、警官ト人民ト小衝突アリ。概シテ頗ル穏ヤカナリ。見物中感ジタルハ、(一) 巡查ハ全然看護人ノ如ク、人民ニ対シテ毫モ積極的の追究ノ態度ニ出デザルコト、(二) 人民モ概シテ規律ヲ守リ、漫リニ反抗ノ態度ニ出デザルコト、是ナリ。夕方ニ至リ、民家ノ窓ヲ毀チ、路上ノ街灯ノガラスを傷リタルモノナドアリシモ、其数モ少ク、且ツ多クハ少年血氣

ノ者の所爲ニ出ツ。群衆ノ中、一割以上ハ女ト子供ニシテ、中ニハ日曜ノ野外散歩ヲスル位ノ考ニテ、夫婦連レニ子供ヲ携テ来会セルモアリシ様ナリ。群衆ノ中ニ交リテ、十三位ノ女ノ子、パンヲ売リテアリシガ、二ツノ大キナ籠ヲ地上ニ並べアルニ、立錫ノ地ナキ程ノ群衆ノ中ニアリテ、商フニ差支ヘナキ様ヲ見テハ、感ズルノ外ナシ。併シ他方ニ在テハ、巡查ガ人民ノ一隊ノ滯停ヲ妨グルタメ、一タビ一喝スレバ、一町モ先キニ居ルモノマデ、雲ノ子ヲ散ラス如ク逃ゲ走ルニ至ツテハ、其意氣地ノナキコト亦驚クニ堪ヘタリ。實ニ弱イ奴等ダト思ヒヌ。多少ノ例外ハアランモ、予ガ見タル所、大体ニ於テ、人民モ巡查モ兵士モ、揃ツテ頗ル穩ニシテ、政府ト金權ニ反抗センガタメニ起レル連中トハ思ハレヌ程ナリ。Pathaus 前ノ、誰ヤラノStatutの前ニ、白地ニテ赤地ノ布ニ染メ抜キタル、Hoch die Revolutionノ文字ノ前ハ、通ルモノ欲呼ノ声ヲ放ツモ、更ラニ革命ヲシクナシ。日本ナラバ、怪我人ノ十人ヤ二十人ハアリ、又人民ト警官トノ衝突モ相当ニアリシナラント想ハル。二時マデ見物シ、昼食ヲ喫シテ帰ル。……」

一八日、月曜日。「……今日ノ新聞ニ依ルニ、第十六区方面ニニテハ、昨日ノDemonstrationニ大部衝突アリ、兵ヲ繰リ出シテ発砲スルニ至リ、死者一名、傷者八九名ヲ出ストアリ。新聞ノ記事ニ依リテ、別ニ記事ヲ作りオカント思フガ、矢張、

場末ニテハ氣荒ノコトアリシト見ユ。夫レカアラヌカ、今日モ騎馬ノ兵百名位宛、群ヲナシテ警戒ノ為メ往来スルヲ見ル。……」

二一日、木曜日。「……今日ハ、此間ノDemonstrationノ時殺サレシ労働者ノ葬式アリト云フ故、Bressan先生ト往ツテ見ル。途中、打テ毀サレタ学校ヲ見ル。時間ガ少シ遅カリシ故、行列ハ既ニFriedhofニ達シ、胸ニ赤イ徽章ヲツケタ社会黨員、続々帰ルニ会フ。兎ニ角Friedhofマデ往ツテ見ルニ、会葬者、野次馬、男女合セテ無慮数千名。半バハ女ナルニ驚キタリ。此文ケノ人間ガ集レバ、余波トシテ何カ事ノ起リサウナモノナレド、極メテ静肅ナルニ驚キタリ。最モ社会党本部ニテハ、万一ノ事ナキ様ニトノ用心アリ、党中重ナル者ヲOrdnerトシ、赤イ腕章ヲ携ヘシメ、其制令ニ従ハシムルコトセリ。併シ斯クモ静肅ナルハ、之ノミニハアラジ。Bressan君曰ク、我國人ハ他ノ國ノ人ト異リ、Nationaliststageヲ以テ最緊要ノ事トスルヲ以テ、所謂「ismus」ハ之ヲ第一ニ置ク。従テSozialdemokratienモ他國ニ於ケルガ如ク熱狂セズ。Arbeiterノ如キハ、概シテ極メテ従順ナリ。偶々先日ノ日曜日ノ如キ出来事アルハ、Arbeiter自身ノ発意ニ因ルモノニアラズシテ、少数ナルMobノ煽動ニ由ルモノナリト。左モアリナン。因ニ云フ、Wien市民ノ約四分ノ一ハSozialdemokratenナリト。之モBressan

君ノ話ナリ。……」

資料の蒐集——明治文化研究者として——

昭和六年六月二十四日、『東京朝日新聞』。「閑談の閑談」所収。

日清戦争前後

『経済往来』昭和八年一月号。「時の流れを語る」という小特集で、「日露戦争前後」小野武夫、「欧州大戦前後」石浜知行、とならんで掲載。「閑談の閑談」にも所収。

B 知友・先達を語る

僕の親た河上君

『中央公論』大正八年三月号、特集「社会問題研究の爲めに起る河上博士論」に寄稿したもの。(ほかに小泉信三、足立北鷗、堺利彦、瀬川秀雄、河津通が寄稿。)

吉野は、早い時期、明治三十八年八月の『国家学会雑誌』に、「河上博士訳述『歴史之経済的説明 新史観』を読む」という書評も書いている。河上肇が『自叙伝』で回顧しているところによると、この「訳述」はセリグマンがマルクスの唯物史観を解説したものであったが、河上は当時「哲学上の素養」に乏し

吉野作造隨筆解題(飯田)

かったので、弁証法という術語を「何か奇妙な言葉に訳し損つてゐた。それにたいして、「ヘーゲルの法律哲学を卒業論文に書いた吉野作造君から、私信で当時注意を受けたことを覚えてゐるが、これは私が特別に無知だったのではない。吉野君の方が特別だったので、その頃の普通の法学士は、哲学上の素養を少しも有たなかつたものである。……序に書いておくが、吉野君は『歴史の経済的説明』の訳本を、当時『国家学会雑誌』で鄭重に紹介してくれられた。しかし私が弁証法といふ術語を誤訳してゐることなどは、ただ私信で私に注意されたに止まる。私は当時それをゆかしきものに感じたことを、いまだに記憶してゐる。」

明治三十八年といえば、河上が十月から読売新聞に、「千山万水樓主人」の筆名で『社会主義評論』を連載して、センセーションをまきおこす年である。その後、河上は伊藤証信の無我死に飛び込み、まもなく離れて『日本経済新誌』を創刊。四十一年、京都帝大講師、四十二年、助教授。大正二年、ちょうど吉野と入れ替わるようにヨーロッパ留学。帰国後、吉野の民本主義論が論壇を揺るがしていた大正五年、朝日新聞に「貧乏物語」を連載して、経済学のイメージを一変させた。

大正八年一月、デモクラシー論から社会主義論へ時代思潮がシフトしていく中で、個人雑誌『経済学研究』を発刊、マルク

ス主義への接近を表明して青年学生の注目をあび、そこで『中央公論』がこの特集を組んだと思われる。

その後、大正十三年頃から、吉野とは無産運動論においてしだいに道を異にすることになり、昭和三年、京大教授を辞任。翌四年、大山郁夫らと新労農党を結成したが、同五年には、同党の戦闘的解党を共産党的立場から主張して除名されるにいたった。七年、地下運動に潜入、『赤旗』の編集にたずさわったが、昭和八年一月十二日、あたかも吉野作造が最後の病に倒れて賛育会病院に入院する六日前、検査され、やがて治安維持法違反で懲役五年の刑を受けて下獄することになる。

#### 小山君の思ひ出

『新人』大正八年十月号。

吉野の<sup>小山</sup>にたいする追悼の文章としては、ほかに「小山鼎浦の友情」(『六合雑誌』大正八年十月号)があり、本稿とほぼ同じ内容がもう少し詳しくのべられている。また、最晩年の吉野が多数の項目を執筆した平凡社の『大百科事典』(ただし、ア行とカ行まで執筆したところで、入院し死をむかえることになった)にも、「小山東助」の項を書いている。(それは現在の平凡社『日本人名大事典』で見ることができる。)

鼎浦小山東助は、明治十二年、宮城県気仙沼町に生れ、同町

尋常高等小学校を経て宮城県立尋常中学校に入学。在校中、吉野らと回覧雑誌「桜」を編む。仙台第二高等学校でも、吉野と共に『尚志会雑誌』の委員となる。東京帝国大学文科哲学科に入学後、本郷教会に関係するとともに政治に関心をもち、島田三郎に私淑。三十六年卒業後、ただちに毎日新聞に入る。四十二年退社、早稲田大学の講師となったが、大正二年、関西大学の文科長となる。この年立憲同志会成立に際し、国民党派五領袖の帷幄に参して献策、大正四年大隈内閣下の選挙に臨み、ついに学界に訣別して宮城県に立候補し、当選した。以後、大正六年に再選したが、宿痾のため大正八年八月、死去。四十歳。著書に、『社会進化論』、『久遠の基督教』、『光を慕ひて』等。

『鼎浦全集』全三巻(大正十四年)。参照、大井胤治「光炎——鼎浦小山東助伝——」(昭和四十二年)、西田耕三編『鼎浦小山東助の思想と生涯』(昭和五十四年)。

#### 中沢臨川君を悼む

大正九年九月、『中央公論』のち、「中沢臨川君」の題で、『講学余談』および『閑談の閑談』に収録された。

臨川中沢重雄は、明治十一年、長野県上伊那郡南向村に生れ、松本中学、二高を経て明治三十七年、東京帝国大学工科大学電気部を卒業。東京鉄道、京浜電気鉄道技師長等を勤めたのち、

松本市外に中沢電気工業会社を設立し、生れ故郷の伊那谷をはじめ信州の谷々に、中沢式モーターで電燈を灯そうとしたりした。

しかし、東大在学中に小山内薫らと雑誌『山比古』を創刊し、自らの詞華集『鬚華集』を公刊したのを始め、卒業後も柳田国男、田山花袋らと龍土会というサークルを作ってフランス文学の新しい動向を紹介したり、ゲオルグ・ブランデスの『露西亜印象記』を翻訳したり、さらには押川春浪（押川方義の子で、『海底軍艦』等の作者）らと天狗倶楽部というスポーツ・クラブを作り、押川の後を承けて雑誌『武俠世界』を主宰するなど、いわば新しいマルチタイプ知識人だった。大正初年から中央公論等を舞台にベルグソン、トルストイ、タゴール、ニーチェ、ロマン・ローラン、ナポレオン、ラッセル等についての評論を発表。「自然主義」後の「新理想主義」の物興を論じた。

やがて大正四年十月から中央公論に常設された「思潮評論」欄を受け持ち（内外時事評論）欄の吉野作造、「文芸評論」欄の正宗白鳥とならんで、さらに大正八年ごろから「社会改造」論議が盛んになると、サンデイカリズム論やソリダリテ・ソシアル（社会連帯）論などを紹介・論評していたが、そのさなか、大正九年八月、喉頭結核で死去した。四十三歳。

著書に、『旧き文明より新しき文明へ』、『破壊と建設』、『嵐

吉野作造隨筆解題（飯田）

の前』、『正義と自由』、『新社会の基調』、『電子説から見た世界』、『近代思想十六講』（生田長江と共著）、等がある。

没後、島崎藤村、田山花袋、吉江喬松、三淵忠彦らに吉野作造も編輯者として名をつらねて、『臨川全集』が改造社から全四巻予定で刊行を開始したが、二巻を出したのみで終った。多様な「社会改造」論議がしだいに唯物論的コミュニズムに収斂してゆき、「社会科学」をマルクス主義が独占してゆく状況の中で、読者が臨川のロマンティックな「人道主義」の基調から離脱していったためであろう。

なお、木佐木勝『木佐木日記』（昭和四十年）の大正八年八月二十七日の項に、つぎのような記事がある。

「樗陰氏は吉野さんから聞いた話だと言って、中沢臨川が信州で経営していた電気関係の会社が事業不振で解散した時、臨川は私財を悉く投げ出して、社員、職工たちに解散手当として与えたため、自身は全く無一物となってしまったそうだが、「こういうところにも中沢さんの日頃の人道主義者としての信念が現われているのだ」と激賞し、「今でも中沢さんのいた信州では同氏を神のごとく思っている人が多いそうだ」とも言った。なお吉野さんは、「信州の辺びなその土地一帯が、早くから電灯の恩恵に浴していたのも、中沢君のおかげだ」と言っていたと語った。（樗陰氏の話だと、吉野さんも臨川氏も仙台二

高の出身で二人は親交のある間柄だとも言っていたが、いつか高野さんから聞いたところによると樗陰氏も二高の出身だそうで、吉野氏は樗陰氏の先輩に当るのだそうだ。」

ちなみにいえば、前にふれた大正普及会「国民講壇」のグループづくり(大正四年)も、吉野作造・中沢臨川・一戸直藏・三淵忠彦(のち、戦後初代の最高裁長官)の二高組に、吉野がヨーロッパ留学中に知合って親交を結ぶに至った佐々木惣一を引張りこんで、成ったものだろう。(三淵は当時、東京控訴院判事。彼は二高を出て京都帝大法科を卒業しているから、彼も佐々木と二高グループをつなぐ位置にあった。)

有島君の死 有島君の死に面して 有島君の死をどう観るか  
それぞれ、『中央公論』、『文化生活の基礎』、『新人』に、いづれも大正十二年八月号に出たもの。なお、『中央公論』のものは「小題小言」の一節で無題だったが、今回の本巻収録にあたって仮に命名した。

吉野の有島にたいする追悼文としては、ほかに「死んで行く有島さんへ」(『中央公論』同号、巻頭言、「生に成功した人」)『文化生活』大正十二年九月号)がある。

日記で見ると、吉野が有島の死を知ったのは、七月七日に長野県飯田で講演をし、夜行で帰って、朝、新宿から家に向かう

電車の中だった。「八日、新宿にて電車に乗り移る。隣席の人の新聞を読むに不図眼をうつして、死した有島武郎氏とありて同君の肖像あり。上の一字、紙の折れたるに依て見へざるも予は直ぐに頓死と合点し、脳溢血かと速断した。去るにても惜しい事と感慨無量。然るに、内に帰りにて情死と分りて一驚を喫せり。〔中略〕……途中夕刊を買ひ、有島氏の相手は波多野秋子さんなることが分る。変な気がする。身につまされて恐ろしくもなる。」

波多野秋子は『婦人公論』記者として、吉野のところにも原稿取りにしばしば訪れていたからである。また日記によると、有島について、文化生活研究会の同人として森本厚吉とともに、上代たの(のち日本女子大理事長)との縁談をすすめようとしたこともある(有島は夫人を亡くしたあと、三人の幼児をかかえて独身生活をつづけていた)。

なお、森本厚吉については、『森本厚吉』(森本厚吉伝刊行会、昭和三十一年)参照。森本は、明治十年、京都府舞鶴に生れ、三十四年、札幌農学校を卒業。卒業前に有島武郎との共著『リビングストーン伝』を出版。三十六年渡米、ジョンズ・ホプキンス大学院で学び、三十九年、帰朝。四十年、東北帝大予科教授。大正四年、再度渡米、ジョンズ・ホプキンス大学院に博士論文提出。学位を得て七年帰国し、新大学令による北海道帝国大学

農科大学教授に就任した。

そして大正九年、「文化生活研究会」を組織、東京銀座の警醒社に事務所を置く。これは、米国式の University Extension Work をめざしたもので、吉野と有島が顧問となり、警醒社主人福永重勝が協力して、月刊の通信教育誌『文化生活研究』（大正九年五月〜十二年一月）を刊行した。吉野は「政治に及ぼす婦人の力」を講じ、「婦人と政治との交渉」から始まり、「政治と道徳の接近」、「英国に於ける婦人参政権運動」、「政治そのものの進化」と説き進んだ。

大正十年五月、森本・吉野・有島は、三人の関西での講演記録『私どもの主張』を共著で出版した。吉野は「政治家のあたま」に誤られたる本分論」「社会主義の新旧二派」の三篇を寄稿。ついで、大正十年六月から、市販の月刊雑誌『文化生活』を刊行開始。これにも吉野は毎号のように執筆した。

十二年の有島の自殺に先立って、有島は所有の北海道狩太農場を解放したが、その経営を森本に委ねた。この前後の時期、森本は『生存より生活へ』（大正十年十一月）、『滅びゆく階級』（十三年七月）、『創造の生活』（十五年九月）等を刊行。

大正十五年十二月、御茶ノ水に、日本最初のアパートメント・ハウス、「文化アパートメント」を開館。吉野も会合や会食にしばしば利用したが、昭和五年十二月からは一室を借り、

吉野作造随筆題（飯田）

仕事場兼事務所として利用した。昭和三年に森本が理事長に就任した女子経済専門学校（現、東京文化短大）の講師（政治概論）に、五年四月から吉野もなり、同校は文化アパートメントに隣接していて、その便宜ということもあった。

この文化アパートメントには、短期間だが一時吉野と朝日新聞社で同僚だった下村海南なども、居住していたことがある。「私は足かけ七年の台湾の民政長官を辞し朝日新聞社に入社したのが大正十年であり、あくる年十一年外遊から帰り、居を西宮の六甲苦楽園海南荘にうつし、東京では文化アパートに仮寓し、東京大阪を半月交代にしていた。……私の著書六十余冊中三分の一くらいは此のアパートの部屋から生み出たのであった。」（森本博士と文化アパートメント、前掲『森本厚吉』）

また、吉野の弟子のひとり、鈴木義男の次のような回顧も同前書にある。「私は東北大学の教授の職を辞して、上京して弁護士を始めて間のない頃、昭和七年頃、恩師吉野作造先生からお話があり、当時女子経済専門学校と呼ばれていた先生「森本」の経営せられる学校に法律学一般を講義してくれないかといわれ、初めて先生や新渡戸先生にお目にかかり、校風の清新さに打たれた……」。



島田三郎先生を弔す 島田三郎先生の追憶

それぞれ、『中央公論』大正十二年十二月号、『文化生活の基礎』大正十三年七月号に掲載された。いずれも『公人の常識』に収録。「島田三郎先生の追憶」の「島田先生全集刊行記念講演会」の後には、「島田先生「人生の目的」が付されていたが、本巻では割愛した。

なお、大正十二年十一月十四日に永眠した島田三郎の葬式は、十一月十七日に青山葬場でおこなわれ、吉野は島田の履歴を読んで「沼南先生略歴」として『新人』十三年一月号、および『廓清』同三月号に掲げられているものは、その時のものである。

また、吉野は『島田三郎全集』編輯委員の一人（他は山室軍平、木下尚江）にもなっている。（大正十三、四年。全七巻。平成二年、龍溪書舎より復刻。）

菅原伝氏と私

『新人』大正十三年九月号。『公人の常識』にも収録。

参考までに、平凡社の『新撰大人名事典』（昭和十三年）の「菅原伝」を写しておく。

「政治家。文久三年八月、菅原忠輔の二男として陸前遠田郡桶谷村に生る。夙に帝国大学に学び、明治十九年渡米、パシ

フィック大学に入ったが、在米中自由党に加盟、桑港に於て愛国同盟会を起し、帰米、機関新聞『十九世紀』を発行した。二十六年再び米国に遊学、二十八年帰朝し、同三十一年以来、宮城県より推されて衆議院議員に当選すること十六回、立憲政友会に属した。この間人民新聞を起して社長となり、大正十三年護憲三派内閣の時海軍参与官に任せられ、日独事件の功に依り勲三等瑞宝章を授けられた。また議院建築準備委員会、国有財産調査会、補償審査会各委員に任じ、殖民事業に従事した。昭和十二年五月九日歿、年七十五。」

外骨翁と私

『公人の常識』に大正十四年一月執筆として収録されているが、初出不明。

吉野の日記の中にも外骨の名はしばしば現われるが、大正十三年七月二十七日と昭和三年十一月十九日のものから引用しておく。

大正十三年七月二十七日。「昼前、外骨君の所へ梅に行く。折角丹精した独り娘、石川清夫人三千代さん、二十二日朝、突然発病、間もなく絶息。医者だの人工呼吸のと騒いでも追ッ付かず、死亡の確定宣告を与へられたのが昼頃とか。飛電に接して飛んでゆき、二三日前に早や帰つたと聞いて、悔を述べに行

く。死んだ者が何のクソと云つた風な元氣のいゝ話はしてゐたが、原稿を二三行書くと、三千代を想ひ出して筆が進まぬなど、正直な爺振りを發揮する。不運な人なり。」

昭和三年十一月十九日。「朝、学校に行く。其前に外骨翁を訪ねる。同翁の妻君、自殺したといふ通知に接したるを以てなり。翁の言ふ所に依るに、翁の下に使つて居つた松井史亨文学士が妻君と通じ、その現場を見付け、直に離婚を申渡し、逐い出したるに、翌日朝来りて詫せしも、頑として許さず。乃ち御勝手に猫いらず三十錢皿を飲み、直に上野の浜野病院に送りて手当を加へたるも効なく、この日朝四時、絶命せし也といふ。これに付ていろく變な事をやりさうなので、親切に忠告を試む。」

宮武外骨の方から吉野作造について語つたものとして、「吉野作造先生の遠逝」(「公私月報」昭和八年四月)がある。

「昨は花房太郎子、本山彦一翁を亡くし、今は吉野作造先生の遠逝、短日月の間に明治文庫の事業を理解され援助されて居た三名士に去られた事は、真に悲愁寂寂の感に堪へない。就中吉野先生と明治文庫とは因縁關係の最も深い間であつたから、予の私情より云へば痛惜無限の大凶變事である。

抑も予が吉野先生の知遇を受けるに至つた発端は、今より十五年前の大正八年一月十八日であつた。

#### 吉野作造隨筆解題 (飯田)

当時、吉野作造、福田徳三、今井嘉幸、左右田喜一郎、渡辺鉄藏、穂積重遠等の法学博士連が主となつて、黎明会といふ新宣傳団体を起され、其初回の講演会を神田美土代町の青年会館で開いた当夜、会場の控室で福田徳三氏に紹介され、初めて吉野先生に接し得たのである。当夜福田氏が講演壇上に於て「私の甚だ尊敬する宮武外骨氏から承つたのであります」云々(黎明会講演集第一所載)と述べられたのは、誤解者の多い予の性格を弁護のためであり、特に予を吉野先生に紹介せし責任保証のためであつた事を後に知つたのである。

此後、予と吉野先生とは相往来する親密の仲と成り、姪女結婚の媒介もされ、予の大学法学部入りは中田薫先生の推荐に因るのであるが、其中田先生と予との紹介者は吉野先生であり、穂積重遠先生の眷顧を受けるに至つたのも亦吉野先生のお蔭である。予の性格を誤解する者で、吉野先生に対して「アンナ者と交際しないがよい」と忠告がましいことを云つた人が二三あつたさうだが、吉野先生はイツモ「キミは外骨君を知らず、世間の隘口を信じて非難するであらう。彼は誤解さるべき性格、其誤解を気にしない性格。世間に偽善者は多いが、彼は唯一の偽善者である。我は偽善者よりも偽悪者を好む。」とハネツケられたさうである。此弁護の一条だけに就ても、吉野先生は予を理解せし恩人であり、莫逆であつたと云へよう。

斯くて明治文庫の成立も吉野先生の大なる援助に依つて遂げ得たのである。

予は文化研究資料としての珍物が手に入る毎に、先づ吉野先生に示して其価値の批判を受ける事にし、それを楽みに働いて居たのであるが、今は幽明相隔て其事も叶はない。嗚呼惜哉悲哉。」

なお、宮武外骨の事歴については、吉野孝雄の『宮武外骨』（昭和五十五年）、『過激にして愛嬌あり』（昭和五十八年）、『宮武外骨 予は危険人物なり』（昭和六十年）等を参照。

#### 服部誠一翁の追憶

大正十四年十一月、『新旧時代』、『公人の常識』および『閑談の閑談』に収録。

撫松服部誠一の伝は、三木愛花「服部撫松伝」（大正十五年四月『早稲田文学』、『明治文学全集4』に再録）以下があるが、ここでは便宜のため平凡社『新撰大人名事典』の「服部誠一」を掲げておく。

「天保十三年奥州一本松城下に生る。父は同藩の儒臣で名は半十郎、洞城と号し椽巨石を食む。明治三年家禄を奉還して東京に出で、撫松と号して文筆を以て立つ。同七年『東京新繁盛記』を著はずや、忽ちにして洛陽の紙価を高め、金四五千円を

得、湯島妻恋坂に新邸を営み、吸霞楼と号した。九年、九春社を興し週刊雑誌『東京新誌』を発刊、『団々珍聞』と並んで甚だ時好に投じたが、十六年二月、時の外相井上馨令嬢の私行を發いて発行禁止の厄に会ふ。尋いで『吾妻新誌』を発刊、約一ヶ年これを主宰した。この間、社長若しくは主筆として民権拡張の政論新聞『広益問答新聞』、『中外広問新報』、『江湖新報』等を相次いで発行したが、何れも政府攻撃の故を以て発行禁止され永続しなかつた。明治二十九年三月宮城県尋常中学校（今の第一中学校）に作文教師として聘せられ、居ること十二年。四十一年八月上京して脳溢血に罹り、同月十八日歿す。年六十七。著作は『東京新繁盛記』以後、同後編、第二世夢想兵衛胡蝶物語、東京柳巷新史、京浜街史、二十三年国会未来記、文明花園春告鳥、稚児桜等があり、またスコット原作の春窓綺語（湖上の美人）や第二十世紀等二三の翻訳物があるが之等は単に署名人たるに過ぎぬといふ。」

#### 瀧田君と私

『中央公論』大正十四年十二号。『公人の常識』および『閑談の閑談』に、「亡友瀧田哲太郎君と私」と改題されて収録。

文中、「そして日米問題に関する考察を寄せて其年の十二月刊に載せたのが中央公論に於ける私の初陣である。」は、正確

には大正三年一月号の「學術上より觀たる日米問題」である。同じく、「それ程暇がないなら私が筆記しませうといふので、辻つかり乗て書いたのが、大正三年四月号の民衆運動論である。」も、正確には同年三月号の「民衆的示威運動を論ず」である。

瀧田樗陰と中央公論のことについては、前引の木佐木勝「木佐木日記——瀧田樗陰とその時代——」（昭和四十年）も参照。

#### 穂積先生の想ひ出

『反響』大正十五年五月号。『講学余談』および『閑談の閑談』に収録。

吉野が穂積の法理学演習で報告した「ヘーゲル法律哲学の基礎」は、その冒頭の一部が『法学協会雜誌』二三卷九号（明治三十七年九月）に發表された上で、明治三十八年一月、法理研究会の「法理論叢 第十二編」として有斐閣書房から刊行された。（選集第一卷、収録）

穂積陳重については、『学士会月報』大正十五年五月、第四五八号「故穂積男爵追悼録」のほか、穂積重行『明治』法学者の出發——穂積陳重をめぐる——（昭和六十三年）等、参照。

#### 吉野作造隨筆解題（飯田）

#### 新渡戸先生と私

大正十五年十一月三日刊の「問題と解決」に「はしがき」として書かれたもの。のち「古川余影」に収録されたとき、編者（川原次吉郎ら）によって「新渡戸先生と私」の標題が付されたので、本巻もそれにしたがった。

新渡戸稲造は明治十四年札幌農学校卒業後、いったん開拓使御用掛を勤めたのち、十七年渡米。ジョンズ・ホプキンス大学を二十年卒業、札幌農学校助教授の辞令を受けてドイツ留学を命ぜられ、ボン、ベルリン、ハレの諸大学に学んで二十四年帰朝し、札幌農学校教授に就任。しかし三十一年ふたたび外遊、三十四年帰朝して台湾總督府技師となった。さらに三十六年京大法科大学教授に転じたが、三十九年九月、第一高等学校校長に就任した。

だとすると、本文の、吉野が「大学の学生であった頃」一高校長室に新渡戸を訪ねたという話は、吉野の思違ひだった可能性が強い。というのは、吉野の法科大学入学が三十三年九月、卒業が三十七年七月、そして大学院にしばらく在籍ののち、三十九年一月には清国直隸總督の招聘に応じて天津に赴いているからである。

他方、新渡戸が「実業之日本」誌上に毎月「修養談」を書きはじめるのは、一高校長になってからしばらくして、明治四十

一年頃からである。(それがまとめられて本になった最初の『修養』で、明治四十四年九月刊。その序文に、「実業之日本」の余白を籍り、毎月二回卑見を陳べて読者に見えて来たが、陳言も積つて今や既に百回に垂んとする。」とあるから、その四年近く前から始まっている勘定である。なお、この『修養』の続編は『世渡りの道』、『自警録』とつづく。)

そうなると、吉野が清国から一時帰国した明治四十一年の夏くらいしか可能性はない。新渡戸が一高校長の職にあったのは大正二年までで、以後法科大学教授に転じ、そして大正八年から国際連盟書記局事務次官としてジュネーヴに赴き、大正十五年までそこにおり、他方、吉野の方は、明治四十二年一月に清国から帰国してまもなく法科大学助教授に任ぜられ、四十三年一月から大正二年七月までヨーロッパ留学しているからである。また大学院生の身分だった吉野が清国から一時帰国したとき、新渡戸が多忙のため健康を害しているという聞いて、小山東助と相談のうえ一高校長室に会いに行ったということであろう。

#### 志賀重昂先生

『中央公論』昭和二年五月号。『志賀重昂全集 第八卷』(昭和四年三月二十日発行)に再録。

志賀重昂の事歴については、『明治文学全集37 政教社文学

集』(昭和五十五年)の「年譜」(佐藤能丸編)が詳しい。

吉野は、志賀が『日本人』(明治二十一年創刊)の初期の主筆格で健筆をふるっていた頃のことは、まだ物ごころついておらず、知らないわけだが、少年時代の彼が日清戦後に志賀に覚えた共感には、明治二十年代初頭の志賀の「國粹保存主義」にみなぎっていた、いわゆる「明治の健康なナシヨナリズム」(丸山眞男「明治國家の思想」昭和二十二年、「戦中と戦後の間」に収録)に通ずるものがあったろう。吉野の政治思想の出発点にあった「明治の健康なナシヨナリズム」と、大正八年を画期とするそこからの脱却過程については、飯田前掲論文、参照。本集巻所収の前掲「日清戦争前後」も、その頃の雰囲気を知る参考になる。それが、第一次大戦後の吉野になると、たとえば「帝國主義から國際民主主義へ」(大正八年六月七月、六合雜誌選集第六卷所収)や、「國家生活の一新」(大正九年一月、中央公論、選集第一卷所収)を書くにいたるのである。

#### 田口先生と私

『我等』昭和二年七月号。

この昭和二年七月から『鼎軒田口卯吉全集』(全八巻 編輯、高野岩三郎、長谷川萬次郎、森戸辰男、田口武次郎)の刊行が始まり、我等社の同人が総力をあげて協力したので、同誌では

この号に「鼎軒田口卯吉博士——その人物と業績——」特集を組んだ。寄稿者は他に、大内兵衛、福田徳三、河上肇、鳥居龍蔵、河津通、木村毅、羽仁五郎であった。

吉野は、長谷川如是閑、大山郁夫、樺田民蔵、井口孝親らが、白虹事件で大阪朝日を退社した後、に創刊した「我等」にたいして、「まるで自分の仕事のやうに考へてゐたかと思はれるほど熱心の後援してくれた」（長谷川如是閑「吉野博士と私」、『批判』昭和八年四月）。白虹事件が、吉野の浪人会との立合演説会一件の遠因をなしたからということもある。一時期、吉野の中央公論と、如是閑等の大阪朝日が、大正デモクラシー運動のオピニオン・リーディングの車の両輪のごとき観を呈したこともあったのである。吉野は、『我等』創刊号（大正八年二月十一日）に「我憲政の回顧と展望」を、三宅雪嶺の「憲政三十年を迎へて」につづく形で、寄せたのをはじめ、同誌にしばしば寄稿した。

なお、吉野は『鼎軒田口卯吉全集 第五卷（政治）』（昭和三年十一月十五日刊）の「解説」を担当した。しかし、「語りたことは沢山あるのだが、病中その意に任せず、匆卒の筆を行つて概略の説述に止めねばならなかつた」。ここではその一節だけを引いておく。その最後の部分などは、吉野自身の姿と重なるとも読める。

吉野作遺隨筆解題（飯田）

「先生の政論を読んで先づ最初に感ずることは、（一）先生の思想的基調に功利的自由主義があることである。この事は経済論策にも無論現はれたことと思ふが、本篇に収められた政論に於ても頗るそれが著しい。功利的見地から自由主義を主張する所に最近代の自由論と異なる所あるけれども、英国思潮の影響の著大であつた当時としては之も亦已むを得ない。只問題はこの英国思潮をどれだけ混りなくどれだけ徹底的に了解して居つたかの点であるが、田口先生の如きは最もよく之を頭に取り入れた一人であることは疑ない。次には（二）論策の背景として絶えず歴史を重んぜられることである。是れ先生が史学に於ける造詣の深き為めでもあらうが、功利的基調に立つの当然の結果として常に現実を忘れ得ぬに因るものでもあらう。従て先生の政論は一面当時流行の自由民権論と大体の傾向を同うし、而も動もすれば彼等の陥り易き輕佻空疎の弊に遠ざかり、着実穩健にして以て一代の木鐸たるの地位を占めて居る。先生の立論はまた概して（三）極めて常識的である。政府の専制を責めなどするときは筆鋒頗る鋭く、その辛辣の点に於て嬌激なる青年政客と異なるなきが如き観を呈するが、其美之等の人達とは全然其立場を異にし、熟読玩味すると我々は毎も成程と首肯せざるを得ないのである。奇を衒はず異を誇らず、公平に誠実にその信ずる所を率直に語ると云ふのが先生の政論に通ずる一貫の特色

の様に思ふ。」

左右田博士を悼む

『中央公論』昭和二年十月、「社会時評」欄。

左右田喜一郎は、明治十四年、横浜に生れ、横浜小学校、横浜商業学校を経て、三十五年東京高等商業学校を卒業。さらに同校専攻部に進み、福田徳三、佐野善作の指導を受け、卒業後直ちに私費留学。ケンブリッジ大学を経て、三十八年、ドイツのフライブルグ大学に入学、経済学でフックス、哲学でリッケルトの指導を受けた。フックスがチュービンゲン大学に移るとともに同大学に転じ、四十二年、論文「Geld und Wert」（貨幣と価値）によって同大学で経済学博士の学位を受けた。時に二十八歳。その後、ベルリン大学、ハイデルベルグ大学、パリ大学、コレヂ・ド・フランス等にも学び、大正二年、十年振りに帰国した。まもなく母校の講師になるとともに、大正四年、先代金作の亡き跡を受けて左右田銀行頭取に就任。あわせて倉庫、信託、保険など関係会社の重役を兼ねた。

吉野が福田徳三と始めた「黎明会」に左右田が参加したことは前述したが、彼は、大正八年一月の黎明会第一回講演会で、「文化主義」の論理を講演している。ドイツで傾倒したリッケルトの新カント派の哲学をふまえて、理想主義と人格主義に

基づいた「文化価値」実現へむけての形而上学的努力を提唱したものである。

同じ頃、桑木巖翼が、新カント派の哲学を社会問題に応用しようとして、また、土田杏村が、端的に「カントとマルクス」を架橋しようとして、それぞれ「文化主義」の立場を打ち出していた。（桑木「文化主義と社会問題」大正九年、土田「文化主義原論」大正十年、参照）

吉野作造は、本巻に収めた「理想主義の立場の鼓吹」に見られるように、こうした「文化主義」「人格主義」「理想主義」の立場に満腔の共感を示しているのである。（本巻「解説」参照）

左右田喜一郎も、「文化主義」提唱のかたわらで社会問題に熱心に取り組み、種々の「所謂新興文化運動」に多大な助成を行っていたことは、本文で吉野も言及しているとおりである。（これは、黎明会への助成等であろうが、前引の米田衷の言にあった、吉野が「横浜の某富豪を説いて、支那人、朝鮮人の学費を出して貰つてゐるが」、大震災でそれが難しくなつて吉野の朝日入社になつたという、その「横浜の某富豪」が左右田であつた可能性も、なくはないだろう。）

左右田は大正十年、神奈川県会館横濱社会館の館長に就任しているが、これは大正七年の米騒動に関連して設立された神奈川県会館が労働者の収容施設として改組されたものである。

そして翌十一年、神奈川県済会「横浜社会問題研究所」が開設され、その所長に就任する。そこで出された「社会問題研究叢書」の一冊『新カント派の社会主義観』（大正十四年）に、左右田は「文化哲学より観たる社会主義の協同体倫理」を寄稿している。これはラートブルフの『社会主義の文化学説』やナトルプの『社会教育学』の議論を、テンニースの「ゲマインシャフトとゲゼルシャフト」論にからめながら、持論の、「文化価値」の「社会的」実現や「協同体倫理」に包摂されえない、「創造者価値」をもった「人間其のもの」の「淋しい独自の」「超個別的個性」について論じたものである。

大正十五年には、その見地から「西田哲学に就いて」という批判論文も書いたが、西田幾多郎による反論「左右田博士に答ふ」に再応答することなく、病に倒れ、昭和二年八月、金融恐慌によって左右田銀行が倒産の憂目を見る心痛の中で、不帰の客となった。

『左右田喜一郎全集』（全五巻）は、昭和五十六年、福田徳三、本田謙三、勝本鼎一、川村豊郎、杉村広蔵の編集で刊行された。左右田博士五十年忌記念会編『左右田哲学への回想』（昭和五十年）参照。

中村敬宇

吉野作造隨筆解題（飯田）

『文藝春秋』昭和六年二月号。

冒頭に「今私は中村敬宇と福沢諭吉の事を書いて居る。」とあるが、吉野による本格的な敬宇論も諭吉論も、結局完成の期を得なかったようである。

なお、吉野は『明治文化全集 第十五巻 思想篇』（昭和四年六月）の「敬宇先生上巻是非解題」を書いている。（第五巻自由民権篇の「自由之理」解題は下出集吉執筆。）

敬宇先生中村正直については、とりあえず、『明治文学全集 3 明治啓蒙思想集』（大久保利謙編）を参照。

鈴木文治君の素描

鈴木文治『労働運動二十年』（昭和六年五月二十八日刊）の序文。

ただし、この序文のサブタイトルに「序文に代へて旧稿を録す」とあるから、これは初出ではない。「旧稿」は目下のところ不明である。

無産運動とのかかわりの中での吉野と鈴木の関係については、選集第十巻で触れられる。

この吉野の文章の書かれた、昭和五年十一月に日本労働総同盟会長を辞任した後の鈴木文治は、昭和七年の無産政党合同で社会大衆党に所属。昭和十五年、反軍演説をおこなった斎藤隆



夫の衆議院議員除名に反対して、社会大衆党から除名された。戦後は日本社会党結成に参加したが、選挙準備中の二十一年三月に没した。

湯浅翁の逝去の報に接して

昭和七年九月の『上毛教会月報』に掲載された、柏木義円宛て書簡である。冒頭の部分の省略は、雑誌掲載時のままである。吉野日記の昭和七年九月二十二日の項に、「柏木さんから送つて来た上毛月報の切抜を次に貼つておく」とあったものである。雑誌では、ただ「吉野法学博士より」として掲げられていたが、今回、仮に標記のような題を付した。また、原文にない句読点は、編者が付した。

これに呼応するような形で、吉野の訃報に接した柏木義円が、「吉野博士を憶ふ」という一文を『上毛教会月報』昭和八年四月号に載せている。全文を引いておく。これも原文には句読点は一切ないが、編者が付した。

「昨年湯浅翁を喪ひ、今復た博士を失ふて予が心に空虚を生じ、特に深き寂寥を覚へる。翁が逝かるゝや博士は一書を寄せ、其中に「私が湯浅翁と情意を同うする境地は、また同時に尊台と感銘を同うする境地なることは尊台に於ても御許認下さる事と存候」と仰せられた。嘗て組合教会の朝鮮伝道に就ては、三

人其所見を一にし、翁は博士の朝鮮統治批判は我意を得たりとして、爾来政教両界の問題特に朝鮮対策に就いては両者の意見能く相投合して居り、翁と深く相許し居たる予は、亦其頃より深く博士に傾倒し居たり。博士は当時転地保養云々と仰せられたれど、私は其れ程とは思はなかつたが、其時既に不治の痼疾に罹つて居られたのだと今更思ひ当りて、御生前御訪ねしなかつたのを深く遺憾とする。博士こそは二度催されたる翁の追憶会の一に於て、是非共御一言を願ふ可き方であつたのにと、其頃亦遺憾として居た。今や時事日に非、思想逆退、言論益々不自由なるの際、隠然デモクラシーの重鎮として思想界の先頭に立ち一世の待望たりし博士を喪ふたるは、実に千載の遺憾である。」

なお、吉野日記によれば、大正四年二月二十四日、吉野は安中教会で講演している。「十二時十何分着く。柏木牧師、根岸橋三郎氏の出迎を受く。臨江館とやら云ふ旗亭にて食事し、二時より教会にて時局論と題して一時間半斗り講演する。」

「満輪を視察して」を『中央公論』に書くのは、大正五年六月号だから、吉野が柏木に会つた方が、湯浅治郎が早朝吉野宅を訪問したのより、一年あまり前だったことになる。

湯浅治郎と吉野の關係については、松尾尊允の「吉野作造と湯浅治郎」『季刊三千里』第四号。昭和五十年十一月）および

「日本組合基督教会の朝鮮伝道」(思想) 昭和四十三年七月 参照。湯浅吉郎「湯浅治郎伝」(昭和八年) も参照。

柏木義円については、『柏木義円集』(二巻、昭和四十六、七七年)のほか、伊谷隆一「非戦の思想——土着のキリスト者柏木義円」(昭和四十二年)、片野真佐子「孤憤のひと 柏木義円」(平成五年)等。

### C 信条を語る

走る者非敵

「新人」明治三十八年六月号。時評欄、「翔天生」の名で。

当時のいわゆる「煩悶の時代」において(たまたま「新人」時評のこの吉野の一文の直前には、「鴿の子」というペンネームの人物が、「所謂青年の煩悶について」評論している)、この吉野の「積極的福音」の立場からする「奮闘主義」が、いかなる意味をもったかについては、本巻「解説」にゆずる。

個人的創意の抑圧

「新人」大正九年八月号。

社会と宗教

吉野作造隨筆解題(坂田)

「新人」大正十年七月号。

賢者ナータン

「文化生活」大正十年九月。のち、「斯く信じ斯く語る」および「閑談の閑談」に収録された。

単行本収録にさいし、一、五の分節が廃され、「僕」が「私」に代えられ、句読点の若干の乱れが正され、末尾から二つ前の文、「予は本誌に於て次号以下フリー・メーションリーに関する研究を公にせんとするに当り、茲に『賢者ナータン』を紹介するは決して徒爾の業ではないと信ずる」が「茲に私の之を紹介するのも決して徒爾の業ではあるまい」と書き改められた。本巻では、句読点の修正のほかは、初出のままとした。

右の傍線部分にあるように、「文化生活」の次の号、十月号に「フリー・メーションリーの話」、ついで十一月号に「石工の技術から人類愛の訓育に」、十二月号に「フリー・メーションリーと独逸皇帝」、そして若干間を置いて、十一年五月号に「人道の戦士に対する迫害」と、きわめて興味深い、本格的な「研究」が展開されている。だが残念ながらスペースの関係で、今回の選集では割愛せざるを得なかった。

文中、「伯林滞在中シアローテンブルクのさる小劇場で或る日曜日の午後」この芝居を観たとあるのは、日記によると、

一九一三年（大正二年）二月八日（土曜日）のことであった。パリからロンドンに移る途中、ベルリン、シュヴェールム、ブリュッセル等に一時滞在しながら旅行していた、二度目のベルリン滞在のことである。（一度目は、一九一一年九月三〇日から翌一二年四月三日まで。）

「午後ハ三時ヨリ Schiller-Theatre ニ Nathan der Weise ヲ観ル。Frei-maurerei ノ思想ヲ現ハセシト云フ。意味能ク分ル。Schiller-Theatre ハ国民教育ノ意味ニテ芝居ヲヤルノトカ聞キシガ、之ト云ヒ、其外 Urei Acosta ト云ヒ、六カシキモノノミヲヤル様ナリ。芝居ハ中々ヨク、値段ハ頗ル安シ。此日ハ満場青年ノ男女ヲ以テ一杯ニナリテ居リシ様ナリキ。」

なお、日記によれば、吉野のフリー・メーソンへの関心はハイデルベルグ時代にまでさかのぼる。ハイデルベルグを去る直前だが、一九一一年一月三〇日に、「Frei-maurerei ノ研究ヲナシ……」とある。

魂の共感——谷崎潤一郎氏の創作を読んで——

『文化生活』大正十一年一月号、および三月号。『斯く信じし語る』および『閑談の閑談』に収録。

単行本収録のさいに、副題が「谷崎潤一郎氏作の『或る調査の一節』の読後感」に改められた。また、初出の「です」「で

あります」調が、「だ」「である」調に改められた。さらに、一月号所載分の結尾の一文、「孰れにしても私は谷崎氏に対して深甚の敬意を表明しつゝ、玆に筆を擱くものであります。」は削除された。しかし、これらの点は、本巻では初出のままとした。ただし、初出の三月号は、「書斎より読者へ」という、当時吉野が『文化生活』に断続的に掲載していた欄の冒頭に置かれたものであった。単行本収録時に「追記」とされたのである。

この点は、本巻でも体裁の統一上、単行本に従った。なお、この部分については初出も、谷崎からの手紙の引用部分を除いて「である」調で書かれていること、見られるとおりである。また、この三月号分は、各節の頭に○が入っていたが、本巻ではそれを削除し、代わりに谷崎の手紙からの引用の前後に、行あけを入れた。これも単行本に従ったものである。

谷崎が、本文冒頭にあるように、『中央公論』大正十一年一月号に発表した「或る調査の一節」は、現在、中央公論社版『谷崎潤一郎全集』第七巻で見ることができる。

クレランボー——

『文化生活』大正十一年三月号。この号の巻頭言の形で、波線で囲まれた一頁のコラムに書かれた。なお、この底本では「クルランボー」となっていたが、誤植と思われるので訂正し

た。原題は「Clerambault」。

このロマン・ロラン『クレランボー』の訳者、野尻清彦とは、後年の大仏次郎である。明治三十年、横浜の生れ。本文中にあるように、吉野の講筵にも列した東京帝大法科政治科卒で、このころ外務省条約局に勤務のかたわら、いろいろのペンネームで泰西の伝奇小説の抄訳を『新趣味』などに発表していた。『クレランボー』は前年刊行のロマン・ロラン『戦争を越えて』に次いで、本名で公刊した二番目の翻訳書ということになる。震災後、『単の源次』を発表して大仏次郎の筆名を用いはじめ、ついで『鬼面の老女』から『鞍馬天狗』の登場となる。この大正十三年末、外務省を辞して創作活動に専念する生活に入る。

『クレランボー——戦時の一人の自由な良心の物語——』は、息子を戦死させた主人公が、愛国心の虚偽に気づき、戦争を否定する行動に立ち上がって、ついには狂信的な国家主義者の銃弾に斃れる物語である。後年の『ドレフュス事件』や『パリ燃ゆ』に通ずる、こうした大仏のヒューマニスティックで、インターナショナルな関心に、吉野が眼を留めたということになる。

#### 自由主義の根拠 ほか

『中央公論』大正十一年八月号。

吉野作造隨筆解題（飯田）

「社会評論雑誌」として掲げられた五項目のうち、ひとつながらりになっている二番目と三番目の項目を取ったもの。

五項目とも「斯く信じ斯く語る」に収録され、その内、最後の二項目はひとつにまとめられた上で、それぞれ、「働かざるものは喰ふべからず」、「各人の利益は各人最もよく之を知る」、「自由主義の根拠」、「社会運動家に対する忠告」という標題が付けられた。

「自由主義の根拠」のみは「古川余影」にも再録された。

理想主義の立場の鼓吹——阿部次郎君の「人格主義」を眺みて——

『文化生活』大正十一年九月号。サブタイトルを落して「斯く信じ斯く語る」に収められた。

また、単行本収録にあたって、「です」「あります」調が「である」調に改められたほか、若干の削除と書き換えがおこなわれた。しかし本巻では、削除された記述、および、書き改められる前の記述に意義を認めるので、初出の形で収録した。

まず、「理想主義の哲学に対する攻撃中最も真面目な最も周到な議論は、最近頃中央公論誌上に於て田中玉堂氏から発表されました。僕は田中氏に対しては、実証主義哲学の巨擘としてよりも……」の傍線部分が、「……最も真面目な最も周到な議

論は、田中王室氏の論作に於て之を見るといふ人がある。私には能く分らないが、兎に角田中氏をば、実証主義哲学の巨擘としてよりも……」と改められている。

『中央公論』に発表された田中王室の理想主義哲学攻撃の議論とは、大正十一年七月増刊号と八月号の同誌に掲載された長大な論文「世界平和の理想に因みて諸家の文化主義を檢討す」のことであろう。(田中王室「救は反省より」大正十二年、所収)そこでは第三節において、土田杏村と左右田喜一郎の「文化主義」の中にあるカント的な「イデア」[Idee]「宗」が、「歴史を作り出し、現にはたらいて居る人間の生活」と「現在の生活に於て時々刻々に実現されて居る価値が文化であること」を閑却していると批判し、ついで、大山郁夫と長谷川如是閑の「階級的」観点を導入した文化論が、「マアクス主義型の doctrines」の議論であると批判した。(それに付随して、桑木嚴翼、金子筑水、阿部次郎の文化主義、理想主義を批判している。)

それにならして吉野は、自分は土田杏村や阿部次郎の理想主義、文化主義に与することを公言したわけである。

つぎに、削除された箇所は、同じバラグラフの末尾の、「只此傾向の思想家の中には長谷川如是閑大山郁夫両君の如き学徳兼備の先輩を有つ事を注意して置きます。」の一文である。そ

して、これを受けて、そのつぎのバラグラフの冒頭、「長谷川大山の両君や田中氏の思想を批判することは……」が、「理想主義と相容れざる立場の諸学者の思想を批判することは……」に改められている。

つまり、「理想主義」哲学を「觀念論」として攻撃している陣営に、如是閑や大山もいるのだが、彼らを「唯物論的立場」そのものに包括してしまうことに、おそらく吉野はためらいを感じて、名前を出すことをやめてしまったのである。

文中にあるように、「数年前までの様に、驚くべき程の頑説迷信が横行して居つた時代には」、「挙つて第一線に聯繫動作を共にした」デモクラシー陣営の仲間が、共通の「敵」の消滅——じつはそれは錯覚だつたことがやがて明らかになるのだが——にもなつて、「思想戦」において「細かに分化」を始め、「同土討」的「内訌」も始まっている状況であつた。その中にあつて、吉野は如是閑や大山を「敵」の陣営に回したくなかつたともいえる。(その数年後、無産政党内閣問題をめぐつて、いわばこの吉野の予言どおり、大山や河上肇と吉野らとは、対立する状況に追い込まれていく。)

なお、杏村土田茂は明治二十四年、佐渡の生れ。東京高等師範学校で博物学を専攻して「進化論講話」(明治三十七年)の兵浅次郎に師事し、「書齋より街頭に」(明治四十四年)を書い

た田中王堂にも大きな影響を受けて、早くから「文明批評家」を志し、大正三年（二十三歳）、王堂の斡旋で処女作『文明思潮と新哲学』を刊行した。翌年、京都帝大哲学科に入学し、務台理作とともに西田幾多郎に師事、大正七年、「現代哲学序論——認識の現象学的考察」を書いて卒業した。ひきつづき大学院に席を置きながら評論活動に入り、大正九年一月、個人雑誌『文化』を創刊して、「文化主義」を標榜した。それは、いわば「カントとマルクス」を架橋し、「社会主義諸派を理想主義的に修正して行く」（享楽的なる所謂文化生活を排す）「解放」大正九年九月）ことをめざすものであった。

この『文化』創刊以来、吉野作造は杏村に支持を寄せ、『マルクス思想と現代文化』（大正十年）、『文化主義原論』（大正十一年）とつづく杏村の仕事にも、共感と理解を示す手紙を送っている。（上木敏郎「土田杏村と吉野作造——吉野書簡を中心に」『信州白樺』一九八一年十月）また、杏村がロンドンで出版した『Contemporary Thought of Japan and China』を執筆するさいに、中国人の氏名の読み方とその英語表記や、中国語文献について吉野に何度か問い合わせ、吉野も周囲の中国人たちを紹介しながら懇切に対応している様子も、手紙に残っている。（上木、同論文）

なお、杏村は右の田中王堂の批判に答えて、「田中王堂氏の

吉野作造隨筆解題（飯田）

批評に対する弁明」を『文化』（大正十一年十月）に書いている。杏村は吉野の死の翌年、昭和九年四月、宿病の肺結核で四十三歳の生涯を閉じた。

王堂田中喜一についても触れておくべきことは多いが、さしあたっては、『明治文学全集 50』の『年譜』を参照。

阿部次郎の『人格主義』は、大正十一年六月刊。大正五年に阿部が縮訳した、新カント派の哲学者、テオドル・リッププスの『倫理学の根本問題』にたいする「補説として」書いた、と序にある。「理想主義のために」から始まり、「理想主義と現実生活」、「人生批評の原理としての人格主義的見地」、「社会生活の内面的根拠」、「当来社会の根本原理」、「国家主義の解剖」、「人格と世界」等と展開されている。

人類の文化開展に於ける種子・地盤・光熱の三要因  
『中央公論』大正十二年二月号、巻頭言。『斯く信じ斯く語る』所収。

「斯く行ひ斯く考へ斯く信ず」

大正十三年十一月刊の『斯く信じ斯く語る』の巻頭に置かれたもの。おそらく、このとき書き下されたものだろう。

評論界に於ける浪漫主義の排斥

『中央公論』大正十五年八月号。『問題と解決』に収録。

## D 見聞を語る ほか

秋の月

『学生筆戰場』明治二十七年十月。

さきの「投書家としての思ひ出——少年時代の追憶」にあつたように、中学三年時の吉野が、さかんに投書雑誌に投稿したものの一つである。この一文は、詞藻欄の「第拾回懸賞文披露」で「記事」のトップに掲げられ、『甲』として賞品に『日本文学集覧』巻部を贈られている。「仙台市光禪通林方 吉野作蔵」とある。「作蔵」が彼の本来の名だったが、父親が手習いの稽古をさせるにあたって、書きやすい「造」の字を教え、のち戸籍上も「作造」に変えたのである。

本文の後に、「評」が付されている。(原文にない句読点は、編者。)

「月に対して家郷を想ひ、更に亡姉の事に及び、極力悲哀の情を写し出す。末段広き世界には云々却て勝りけるの一言を以て一篇を収むる処、甚だ激越に過ぐるが如しと雖ども、其裏面却て無限の悲情を含む。洵に老手となす。敬々服々。」

「月夜の美感」や「悲哀の快感」を論ずる、といったスタイルの美文を創めたのは高山樗牛だったが、少年吉野はそれに「亡き姉上」への思慕を具体的に重ねること、たんなる感傷的な美文以上のものを目指したともいえる。(樗牛にたいしては吉野は、前掲「少年時代の追憶」に、「高山林次郎の二高赴任は大変な評判であつたが私の精神上には大した関係はない」といい、「あの高山の林公か」と言ったという漱石と同様の反応だったようだ。)

「亡姉」は作蔵より四歳年長の長女で、めめといい、養子をむかえ二人の母となつて十九歳の秋に、卒然と歿したが、吉野家では十二月一日の彼女の祥月命日には、かならず馳走して冥福を祈つたものだという。(田中前掲書の引く吉野信次の談話)なお、養子の後添えには次女りえが入り、「吉野屋」は養子が継いだのである。

ヨーロッパ留学中の吉野作造が、単身で日本を離れて最初の十二月一日をむかえたのは、ハイデルベルグでだった。その日、一九一〇年二月一日の日記に、つぎのように記している。

「今日ハ最モ懐カシキ亡姉志め子ノ二十周忌ニ当ル。二十年ハ夢ノ如シ。而モ其間ノ転変ハ、顧ミル毎ニ悵憫ノ種ナラヌハナシ。此姉ニシテ天折セザリセバ、郷家ノ頽廢ハ斯ノ如キニ至ルマジキニナド愚痴をコボシタクナル。篤平モ遂ニ彼ノ世ノ人

トナリス。残ル形見ハみよし一人ノミトナレリ。速ク離レテ更ニ追懐ノ情ヲ深ウス。」

### 劇界の新風潮

『新人』明治三十八年三月号。「翔天生」の名で「時評」欄に。吉野は仙台時代に一時、歌舞伎に通いつめたことがあった。前掲の「少年時代の追憶」にあったように、二中の『如蘭会雑誌』の編輯を小山東助とともに三人でやっていた能勢三郎（のち若杉姓、名古屋八高教授）の手引きで、当時、尾上多賀之助・中村十昇・市川市孝などのいた仙台座で、十日毎に代る狂言を、時には二度見るということをして、数年間「ともかくも古典的な芝居は大抵見つくした」というのである。

後年になっても、とくに留学から帰って数年は、かなり足繁く市村座、新富座、歌舞伎座、本郷座、有楽座等に赴いている。たとえば、大正四年六月二十一日の日記。「午後、本郷座を見る。渡辺華山は愚劣。大文字やは仁左衛門の軽妙を見るべく、入鹿の父は、古代の形物と、現代の荒びた台詞と、西洋式の飛び廻る表情性と、所謂木に竹をついだ代物なり。二番目の弁天小僧は、流石羽左衛門を買ふべきなり。」

しかし、ここでは本格的な劇評ではなく、「人間精神の發達」の「三段の階梯」との関連で、「在来の権威典型」を「破壊」

する「新劇」を歓迎している、若き日の一文を取った。

### 清国の夏

『新人』明治四十二年七月。

明治三十九（一九〇六）年一月から四十二（一九〇九）年一月まで、丸三年に及ぶ清国滞在時のことについては、「支那觀光録」（『新人』明治三十九年四月号）、「清国婦人雑話」（『新女界』明治四十二年四月号）、「あの時あの人」（『経済往来』昭和八年一月号）等がある。また、「支那人の形式主義」（『新人』明治三十九年七月・九月号）は選集第七巻に収録。

この時期の吉野日記は、明治四十年分のみ、それも簡素な記述しか残っていない。

この時の吉野の清国経験もった意味については、第七巻の解説で触れられるが、本巻所収の「評論家としての自分並佐々政一先生のこと」において、「私の支那論は三三年袁世凱の家庭教師をして居った時の貧弱なる経験以外には何の根拠もないと断定」する。「二宮氏の評論」に反駁して、「私は之に対して敢て云ふ、私の三年間の滞支経験は成程今日の私の支那論に何の根拠も与へてゐない。私の支那論の材料は、今日支那全部に亘て活動して居る人々からの直接の報導、若くは之を直接に見聞した人の直接の報告に基くもので……」と述べていたことが



注目される。

大正八年四月三十日の黎明会講演会の記録（『黎明講演集』

第四輯）によれば、吉野はこのとき「支那問題に就て」と題した講演で、その事情をもう少し詳しく語っている。「……三年も居つたので、支那を少し知つて居る様に世間では誤解して居るが、実は余り知らない。其時は主として北方に居りましたが、詰り旧式の官僚畑の人々との交際でありました。僅かの間であるが、夫でも色々の人と交際して友人を求めたのでありましたが、実は殆ど一人の心友を得なかつた。信頼する様な人物に遇はなかつた。故に支那に三年も居つたのだが、其時は支那に人物なしと決めて、大に失望して帰つたのであります。余り支那の前途に光明を認めないから、従て其後も支那の事を研究する積りにもならず、支那の事は全く分らなかつた。」

ところが、ヨーロッパ留学中、各地の基督教青年会などで王正廷「エール大卒、のち排日親米派の外交官として、外交総長など」の噂を聞き、帰国して彼が革命党で活躍していると聞いて、吉野は初めて革命党に関心をもつにいたつた。ところが、「革命党の主なる人々は、其当時沢山日本に亡命して居つた。是は大正二年の第二革命「袁世凱の国民党彈圧に抗議し、李烈鈞らが拳兵したが失敗に終る」の爲と、其年の十一月袁世凱が國會を潰したクーデターの爲であります。是等の亡命客と接近し

て、私は始めて最近の支那に一つ大に勃興する所の大精神ある事を知りました。それから大に感激する所があつて、支那の事を研究し始めたのであるが、是は実に大正三年春頃からの事でありませう。」

大正三年の日記は残っていないが、大正四年四月二十六日に、「三時より、政治史演習の催にて、戴天仇君の講演を頼む。支那政治思想の変遷といふ題にて。」とか、同年六月五日、「四時過より同気倶楽部にゆく。孫逸仙氏の講話をきく。戴天仇君通訳す。」とあるから、後までつづく戴天仇や殷如耕らとの接触が、少なくともこの頃までには、できていたことがうかがえる。

ハイデルベルグ大学——「滯德日記」より——

「新人」明治四十四年三月号の「滯德日記」から、冒頭の一項のみを取つた。省略した以下の項目は、「独逸の教育」、「教会と学校」、「新教と旧教」である。なお、「滯德日記」は四月号にも続編が出た。また、同じ時期、「新女界」の三、四月号にも、「独逸見聞録」が連載されている。（その冒頭の一項を、本巻では次項に収録。）

いずれも、ドイツのリーデンハイム Riedenheim という、ヴェルツブルグ近くの寒村（コルムシュテッター家）に吉野が長期滞在していたときに、書き送つたものである。一九一二年

一月七日午後から書きはじめ、九日の夜になって書き終つて、「海老名先生に宛て送る」と日記にある。「新人」も「新女界」も、海老名が主宰する本郷教会で出していた雑誌だった。

また、留学時代の紀行文としては、ほかに「伯林より巴里へ」(「新人」大正元年八月)がある。

選集では、吉野日記の現存分すべてを収録することにした。ヨーロッパ留学時代の日記は、最初の三ヵ月ほどを除いて、ハイデルベルグ滞在中の一九一〇年八月六日から、ウィーン、ベルリン、パリ、ロンドン、そしてアメリカ経由で一九一三年七月三日に横浜に帰着するまでが現存している。そちらで見ることができるヨーロッパ時代の紀行文類は、スペースの関係上、最小限の抄録にとどめた。

なお、文中の「エリネック先生」は、いうまでもなく Georg Jelinek。吉野は一九一〇年の十一月六日(日)、十二時頃、イェリネックをブンゼン・シュトラッセに訪ねている。「五十六七ニ見ユル中肉(ト云フヨリモ小肥リノ)中背ノ老紳士ナリ。低声ニテ親切サウニ話ス。折アシク客ヲ招待シテルノデ、暫時話セルノミニテ帰ル。」

そして、翌七日のフライナー教授の「現代の国家と教会」、十日のレヴィ教授の「英国とドイツ」につづいて、十一日、イェリネックの「近代国家の政治 *Politik des modernen*

吉野作造隨筆解題 (飯田)

*States*」という講義を聴講している。(同日夜は、ヤーゲマン「ビスマルクの国法論」とオンケン「ドイツの大権力と対外政策」を聴いている。)レヴィの講義が「頗る浅薄」、オンケンのが早口でしゃべって「能ク分ラズ」だったのにたいし、イェリネックのものは「低声ナレドモ能ク分ル」。とくに二十六日の「英国内閣ノ起源ニ関スル講義」などは、「一寸面白ク聞ケリ」。十一月十二日にハイデルベルグ大学に提出した冬学期(ゼメスター)聴講登録表が日記に貼りつけてあるが、それによると、右のイェリネック、ヤーゲマン、フライナー、オンケン、レヴィのほか、Weber「資本主義時代における文化問題 *Kulturprobleme im Zeitalter des Kapitalismus*」も登録している。そして十一月二十九日に聴講しているが、感想等は記されていない。

十二月十九日から吉野は、ハイデルベルグ大学の学生「ハーネ Hahne 君」に招かれて、ヴェストファリアのシュヴェール *4 Schwelien* という人口二万人の小都市で、クリスマス休暇を過ごした。(その時のことを書いたのが、「新女界」所収の「独逸のクリスマス」である。)そこに、二十一日、イェリネック先生夫妻から、来たる一月十一日、シフ・ホテルで七時半から晩餐とダンスの催しをするから出席されたいという招待状が回送されてきた。

しかし、吉野はシユヴェールムに八日間滞在した後、ボン、マインツ、ダルムシュタットを観光して、二十九日からバイエルのリーデンハイムに移り、そこにしばらく滞在することになる。一月十四日、「午後、新聞來ル。一大悲報ヲ伝フ。」[三] Nek 先生ノ死。去ル十二日、夜ノ講義中(多分 Seminar ナラシ)、卒中ニテ俄ニ斃レ、二時間ニシテ息絶ユ。享年六十。先生ハ Wien ニ生レ、一八七四年、奥國ノ行政府ニ入りシガ、間モナクヤメテ Wien 大学ノ Privatdozent ナル。後、教授トシテ Basel に至リ、更ニ Heidelberg ニ転ゼシモノナリ。

#### 独逸のクリスマス

前項で述べたように、「新女界」明治四十四年三月号の「独逸見聞録」の最初の項。省略した以下の項目は、「独逸の新年」、「三十年前の日本端書」、「独逸の婦人」。

#### 古いサロメ

『新女界』大正三年一月号。

吉野はヨーロッパ滞在中、しばしば劇場やオペラ座に出向いている。オペラを最初に観たのは、一九一〇年十一月十九日、ハイデルベルグの小劇場での「Der Troubadour」というイタリア物だったが、彼がオペラの魅力に本格的に開眼したのは、

同年十二月二日、マンハイムの Hoftheater にまで出向いて、ワグナーの「ローエングリン」を観たときだった。これはエングベルト君という、これもおそらくキリスト教青年会で知り合った学生の手引きで、あらかじめテキストを勉強してから行ったことにもよるが、大感激の様子を日記にとどめている。

「先ツ音楽ノ雄大艶麗ナルニ驚キ、舞台ノ華ヤカナルニ驚キ、歌ノ美シキニ驚ク。……蓋シ Oper ハ西洋特業ニシテ、日本ノ芝居ナドハ、如何ニ發達シテモ Operette カ Schauspiel 位の所ナリ。但シ Oper ハ Orchestra ト Singen トガ非常ニ發達シテ居ル割合ニ、身振ガ如何ニモ簡單ナリ。之ニ日本ノ踊ノ趣味ヲ入レタラバ完全無欠ノモノトナランカト、素人考ニ考ヘタリ。兎ニ角、綺麗ナルコト、目ト心トヲ恍惚タラシム。殊ニ雌ノ妙ニ至テハ、言語ニ絶スR Wagner トハ偉イ男ナリ。」

その後しばらく日記にオペラのは出てこないが、吉野のオペラ熱が再燃したのはパリ時代、一九一二年の暮(十一月三十日)、「狩野(直喜)先生」をつれて Odeon 卽ち「Viel [Alt] Heidelberg」の舞台を見に行った頃からである。十二月四日に「ポールとヴィルジニー」を見に行ったあと、十二月十六日、やはり狩野らと「タンホイザー」を観て、「殊ニ、Elisabeth ノ終始貞操ト熱愛ヲ傾ケテ渝ラザルニハ、覚ヘテ暗涙ニムセビタリ。」

十二月二十五日には、今度は「トスカ」と「カヴァレリア・ルスティカーナ」を観にいったが、「WagnerモノニハEysticナ所アリ、現世ヲ超越シテ他界ニ逍遙シテルノ思アル」に反して、こちらは「何処マデモ世話物的」で、狩野先生と共に「Tannhäuserヨリモ面白クナシ」の感をもった。しかし、一月三日に「アイター」を見たときは大いに感じ、そのあと一月十七日に「魔笛」、二十日に「ミニヨン」を観たあと、二十一日に「Saloméヲキ、ニ行ク。Italiaノ人ノ仏語ナレバ発音奇怪ニシテ、感興更ニ乗ラズ、寧ろ幾分失望ノ気味ニテ帰ル。」これがリヒアルト・シュトラウス作曲の方である。

その語、「トリスタンとイゾルデ」「ラインの黄金」等も聴きに行っているが、マスネー作曲の「ヘロディアードHerodiade」の方に接したのは、一九一三年三月二日、ケルンからブリュッセルに行く途中で下車した、リエージュのマティネーであった。前回の「Salomé」が「著シク所謂現代的色彩ヲ帯」びていたのに対し、こちらは「在来ノ女」で、「対照頗ル面白ク覚ウ。」

#### 満韓の旅「抄」

『新女界』大正五年六月号。

九項目からなる紀行文であるが、最初の「朝鮮の女学校」と、

吉野作造隨筆解題(飯田)

後半の「聖者高太夫」「王揖唐の状況」「長春より哈爾濱」「車中同胞の不行跡」を取り、中間の「明治天皇御逸事」「馬賊の難」「満州の官兵」「朝鮮吉林見物」を割愛した。もっぱらスペースの関係である。

この「視察」が吉野にとって、また日本人の朝鮮観、植民地観にとって、持った意味については、選集第八巻で論じられる。

#### 袁世凱及其家族

『新女界』大正五年七月号。

袁世凱の死を契機に書かれたものだが、前掲「清国の夏」、および前引「清国婦人雜観」と内容的に重なるところがある。

#### 青年思想の最近の傾向

『新人』大正九年九月号。

東京帝国大学法科の学生の思想傾向の変化について述べたもの。大学教師としての吉野の側面が窺える。

#### 夏休み中の青年諸君に告ぐ

『中央公論』大正十一年八月号、巻頭言。「斯く信じ斯く語る」に「青年の銷夏法」と改題されて収録。

## 『ローザ・ルクセンブルグの手紙』序

井口孝親訳『ローザ・ルクセンブルグの手紙』(同人社書店、大正十四年七月二十五日刊)の序文。

原題は「此書をはじめ読んで読んだときの感想」。この序文を書いた当時、吉野は肋膜炎による最初の長期入院中で、ヨーロッパ留学中の井口から送られてきた原稿を、「二三年前」に「はじめ読んで読んだときの感想」を「おもひ出して書くの外」なかったのである。

本文中にあるように、井口は吉野が大学で教えた最初の学生の一ひとりである。大正五年六月の『中央公論』に、井口は「大学講壇における吉野博士」を書いて、そのころの吉野の講義ぶりを伝えている。(井口『未来は我等のものなり』大正八年四月、佐藤出版部、にも収録。)

井口は大学卒業後、いったん大阪朝日新聞社に入社したが、白虹事件で長谷川如是閑・大山郁夫らと迎撃退社、大正八年二月、長谷川・大山らの『我等』発刊に参加して手伝う。まもなく、九州帝国大学に就職が決まり、ヨーロッパ留学したが、ドイツ滞在中に難病にかかり、五年間をスイスの高山療養所ですごした。(その間、吉野は如是閑らと、その治療費・滞在費を捻出、送金するために苦労している。)昭和四年一月、帰国し教壇に立ったが、昭和七年十月二十一日、病死した。(此朝、

福岡より井口孝親君死去の飛電あり。彼もとう／＼逝つたか。愁傷にたへず。」同日、吉野日記)。没後、『自殺の社会学的研究』が遺著として友人・同僚によって公刊された。(清和書店、昭和九年九月十五日刊)

## 『維新前後に於ける立憲思想』推薦の辞

尾佐竹猛著『維新前後に於ける立憲思想』(大正十四年十二月一日、文化生活研究会発行)の序文。原題は、「本書推薦の辞」。「公人の常識」に、「尾佐竹猛君著『維新前後に於ける立憲思想』推薦の辞」と題して収録された。

尾佐竹猛は、明治十三年一月、石川県に生れ、同三十二年、明治法律学校卒業。判検事登用試験に合格して、同三十五年、判事に任ぜられ、各地裁、控訴院判事を歴任後、大正十三年、大審院判事に就任した。昭和三年、法学博士の学位を受く。(同年七月十二日の吉野日記に、「午後、九大の藤沢『親雄』君来る。小野塚先生の総長室に中田『薫』君と共に会合し、今中『次鷹』君推薦の事を相談す。つまり佐々『弘雄』君の後任として、教授として赴任する事に内談を決める。……明治文化研究会よりは、近くは尾佐竹猛君の東大より法学博士の学位を与へらるゝあり、又今中君の栄転あり。同人の名譽として大に意を強うするものあり。」とある。)

著書には、この本のほかに、『日本憲政史大綱』『日本憲政史論集』『明治政治史点描』『明治文化叢説』『幕末維新の人物』『明治文化史としての日本陪審史』『明治警察裁判史』などがある。昭和二十一年十月歿。

#### 岡田文相の社会主義研究

「反響」大正十五年六月号。のち、『講学余談』および「閑談の閑談」に収録。

意を尽くした文章なので冗言を加える必要はないと思うが、「岡田文相」は岡田良平。元治元年、遠江掛川藩士の長男に生まれた。吉野が学生時代に傾倒した一木喜徳郎の表兄にあたる。父の家塾で学んだのち上京、第一高等学校、大学予備門を経て、東京大学に入り哲学科を専攻、二十年七月、帝国大学文科大学を卒え、大学院入学。吉野が本文で取り上げた「社会主義の正否」は、この大学院時代の「研究」である。

二十三年十月、第一高等中学校教授となり、二十六年二月文部省に入って視学官となる。以後、官職を歴任し、三十四〜六十年文部総務長官、ついで宮内省御用掛となり、三十七年、貴族院議員に勅選さる。四十年、京都帝国大学総長、四十一年、桂内閣で文部次官。大正五年には寺内内閣で文部大臣となり、大正十三年、加藤内閣で再び文相に就任したのである。

吉野作造函筆解題（飯田）

文相就任後まもなく、大正十一年以来あった学生連合会（F S）が、学生社会科学連合会（学連、S F S S）と改称し、同十三年十一月、高等学校長会議は各高校の社研の解放措置を申合せている。そして、十四年十二月、京都府警が社研関係学生検挙のために京都帝大寄宿舎に無断立入して問題化し、「京都学連事件」に発展した。十四年一月十五日、京大だけでなく全国の社研学生が検挙され、最初の治安維持法適用事件となる。ついで五月、岡田文相による学生・生徒の社会科学研究禁止が高校・高専に通達された。吉野のこの一文はその直前あたりに書かれたものだろう。六月五日には、岡田文相の内訓に抗議して東京帝大・早大に学生自由擁護連盟が結成されている。ちょうど浜松の日本楽器で大争議が展開し、評議会が全組織をあげて支援する中で、学生たちも大勢駆け付けていたころである。

この年の十一月、吉野は安部磯雄・堀江掃一と「堅実な」無産政党の結成を提唱。以後、社会民衆党、日本労農党、労働農民党、等が最初の普選をめざして乱立・訂争する時期に入り、一年余を経て、昭和三年二月の普選の直後、「三・一五事件」で共産党員全国大検挙、四八八人起訴、という事態に急展開する。同六月には、治安維持法「改正」が緊急勅令として公布され、死刑と無期刑が追加された。

この「岡田文相の社会主義研究」が発表された一年後、昭和二年七月号の『婦人公論』「今月の問題」欄に、吉野は「獄中の知人から」を寄稿している。

「筆者は思想犯とでもいふのであらうか、例に依て社会改造の第一線に起つ勇敢なる闘士としての活動がたゞつて囚らざる獄の人となつた。年は二十前後、多少血気にはやる所はあるが直情真摯にして愛すべく又敬すべき青年である。友人としては洵に頼もしい人物であるが、斯んな人が社会に対する反逆者として刑獄に苦しまねばならぬとは、私にどうしても合点がゆかない。彼の罪か、社会の罪か、それは今私の問ふ所ではないが、彼が一寸娑婆に出て来て私に書き送つたものを見て大に感ずる所あり、その儘次に之を載せて読者の一察に供する。読んで何ものか頻りと私共に考へさせるものがある様に思ふ。」

#### 宮島資夫君の「金」を讀む

『中央公論』大正十五年七月号の「時評」欄に掲載された。

『講学余談』および『閑談の閑談』に収録。そのさいに「『朝日平吾論』という副題が付けられた。」

朝日平吾の安田善次郎暗殺が、いわゆる昭和の「超国家主義」の運動、ないし「革新右翼」とでもいうべき行動様式の先驅をなしたものであることは、つとに橋川文三などが指摘した

ところである。のちの言葉でいえば、「左翼的」心情にもとづき「右翼的」行動（テロリズム）であり、ブルジョワ的なもの、ないし半封建的暴力資本主義にたいする呪詛の心情が、大衆天皇制的なもの結びついた形態である。

これに、いち早く目をつけたということは、「私のやうに現代を一歴史的事実として研究せんとするもの」と自負する吉野の、さすがというべきセンスである。吉野のファシズムにたいする態度については、選集第四巻の解説で詳論されるが、女婿の赤松克麿の「国民社会主義運動」への傾斜、なかならず軍の「青年将校」と結託しようとする動きにたいして、吉野がきわめて厳しい姿勢を示していたことは、日記でも随所にうかがえる。「博士はファッショとは最も勇敢な抗争者で、その支配を受くる位なら死んだ方がましだと云はれてゐた。」と木村毅が証言（吉野博士と明治文化の研究）赤松前掲書）しているやうな最晩年の吉野であったが、昭和八年、「転向の時代」が幕を開けつつある時に、五十五年の生涯を閉じたのであった。

朝日平吾については、奥野貫『嗚呼朝日平吾』（大正十一年）参照。

宮島資夫は、明治十九年、東京四谷に生れ、小学校を出たあと砂糖問屋や三越呉服店に奉公したあと、職を転々として放浪生活を送るうち、大正三年、大杉栄のサンヂカリズム研究会に

入り、『近代思想』の発行人となり、同五年、小説『坑夫』を出版、発禁となった。十一年、評論集『第四階級の文学』を出し、十五年にこの『金』を刊行したあと、一時、小川未明などと雑誌『矛盾』を創刊したりしたが、昭和五年、出家して天竜寺にはいった。戦後は浄土真宗に帰依して、二十六年歿。